とある一人の幻想操作

とある作者の原作破壊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある一人の幻想操作

【Ｎコード】
Ｎ０１０４Ｐ

【作者名】
とある作者の原作破壊

【あらすじ】
とあるところで、一人の赤ちゃんが産声をあげた。名前は九条龍也。
彼には前世の知識があり、気づいたら、神さまにあったわけでもないのに転生していた！？しかも身体能力は人外で、能力はチートで、、、、
そんな彼が世界の考察をしていると、学園都市、超能力という言葉

を耳にする。

ここは――――――「とある魔術の禁書目録」の世界だった！？彼は能力を駆使して、原作介入を目指す。

本作は不定期更新です。これはネタとネタとネタでできていたりします。

それでは、とある一人の幻想操作、始まります。↑りりなの風に。

とある一人の幻想操作　～プロローグ～（前書き）

はじめまして、作者です。

プロローグはこんな感じですかね？

さっそくですが、使ってほしい能力等があれば、いってください。

できるだけ入れていきたいですね。

あ、作者がカバーできるネタでしたらね？

とある一人の幻想操作　～プロローグ～

とある路地裏で、一人の少年が全力疾走していた。

否、”全力疾走”という表現は正しくないだろう。

何故ならば少年は、人外に相応しいぐらいの身体能力があるのだから。

少年は路地裏を出るために、大通りに向けて絶賛逃走中である。

何から逃走中かと言うと――――

「ちょっと！待ちなさいよ！！何で逃げる訳！？」

後ろから追ってきているのは、茶髪の少女である。

灰色のプリーツスカートに半袖のブラウスにサマーセーターという格好をしており、肩まである髪をなびかせながら、接近してくる。

端から見れば、仲のいい男女の痴話喧嘩に見えるかもしれない。そう――――

――バリバリリリッ！！！

「うわッ！危ねーじゃねぇか！！軽く死ねるぞ！？お前は俺を殺す気か！？」

……少女から迸る雷撃がなければだが。

飛ばされた雷撃は少年に向かって行くが、回避される。

雷撃の威力は、少年の代りに犠牲になったアスファルトが保障してくれてる訳で、一撃でも食らったら、即昇天である。

全くもって笑えない話だ。

そんな無茶苦茶な雷撃を放っている少女の名前は、御坂　美琴。

ここ”学園都市”において、１０人といない”超能力者（Ｌｅｖｅｌ　５）”の序列三位の発電系統能力者、通称”超電磁砲（レールガン）””電撃使い（エレクトロマスター）”の御坂　美琴である。

分からない人の為に説明さよう。

ここ、学園都市は、総人口２３０万人の巨大都市で、その人口の八割が学生というとんでも都市だ。

しかし、驚くのはそんな陳家なことではない。

学園都市では、”脳を開発”しており、”超能力”があるところだ。

一重に”超能力”と言っても、その種類は様々で、”発火能力者（パイロキネシスト）”や”空間移動能力者（テレポーター）”、”肉体再生能力者（オートリバース）”など、より取り見取りである。

さらに、強さも様々で、下から順に”無能力者（Ｌｅｖｅｌ　０）””低能力者（Ｌｅｖｅｌ　１）””異能力者（Ｌｅｖｅｌ　２）””強能力者（Ｌｅｖｅｌ　３）””大能力者（Ｌｅｖｅｌ　４）””超能力者（Ｌｅｖｅｌ　５）”と分類される。

上がることはできるが。

能力の行使には、演算が重要で、演算ができなければ、一部の例外以外は能力の行使は不可能である。

個々の能力は、”自分だけの現実（パーソナルリアリティー）”が影響して決まってるらしく、ごく稀に、希少能力を持っている奴がでてくるそうだ。

”自分だけの現実”は、能力発現の根本法則であり、能力者が個々に持つ感覚のこと。「手から炎を出す可能性」など現実や常識から切り離された独自の認識や感覚、土台となる自分だけの世界観を指

す。

学園都市では、能力レベルに合った学校に通うことを義務づけていて、能力レベルに見合った奨学金が降り、仕送りなしでも食っていける。

その為、子供が寮に入ったのを確認して見捨てる”置き去り(チャイルドエラー)”何かが出てきた。

他にも、身体検査(システムスキャン)だの、素養格付(パラメータリスト)だの、多重能力(デュアルスキル)だの、色々なことがあるが、そこは割愛しよう。

「ねぇ、りゅう兄待ってってば!!」

「待てるかっ!?待ったら10億ボルトの餌食だろ!?」

少年はそう言いつつ、アクロバティックな動きで次々と放たれる雷撃を回避している。

少年の名前は九条　龍也。

電撃少女の美琴からは「りゅう兄」と呼ばれているが、別に血の繋がりがあるわけではない。

理由は簡単だ。龍也が幼少期の美琴とよく遊んでいたからだ。

美琴は中学生で、龍也は現在高校生。出会った時は、まだ互いに小学生以下で、龍也が年上ということで「りゅう兄」なんて呼ばれているのだ。

「一回くらい勝負してくれたっていいでしょう！」

「もう次で再会してから３４回目だ！どこが１回だよ！？……はぁ、昔は素直な子だったのに。」

次の瞬間、雷撃の威力が増した気がした。

再会してから、と言うのは、ここ８・９年会ってなかったからである。

何の運命か、ここ最近再会して、いきなり「りゅう兄！」と叫びながら美琴が抱きついてきて、顔が真っ赤になったと思ったらバッっと離れて、携帯が取られたかと思えば、アドレス交換などを勝手にされて、たまに会うようになったのだ。

それだけならまだ良かったのだが――――――

後ろ向きに走っていた龍也は、あることに気がついた。

美琴がポケットから何かを取り出したのだ。

龍也の知る限りでは、美琴が道具を使って能力を行使する方法はいくつかある。

砂鉄を使った切れ味が馬鹿高い砂鉄剣や、電磁力で周りの金属を操作しての攻撃、それを応用した人形の操作などなどだが、常に携帯している道具をどれも使わない。

携帯している道具を使った技は、たった一つ。

これから使われる技は、他のどれよりも威力が高く、速く、広範囲だ。

取り出されたパーツはコイン。

電磁力操作による、美琴の十八番の必殺技。

――――――バチバチバチバチバチッ！！！！

美琴の体が、電気を帯びていく。

「待てってッッ」

次の瞬間――――――

「言ってんでしょうがッッ！！」

バシュゥッッッ！！！！

バチチチチチチッッ！！！！

コインが朱色の線を引きながら、飛んでいく。

『超電磁砲（レールガン）』

美琴の代名詞、超電磁砲、主にゲームセンターのコインを用い、音速の３倍以上で放つ。

空気との摩擦熱で溶けてしまうため射程は５０ｍだが、威力や撃ち出す質量を調節すれば射程は伸びる。

その威力は、衝撃波だけであちこちがボロボロになる。

そのトンでもな攻撃は、龍也に吸い込まれるように飛んで行き、龍也に当たった――――

――――ように見えた。

否、確かに当たっていた。

右手に。

瞬間、バキン。

と、収束された電気が胡散していく。

「何でりゅう兄には当たらないのよ！！」

「（し、死ぬかと思ったーーー！！）ちょ！？ミコト！？超電磁砲（レールガン）はないだろ！？」

九条　龍也は無能力者だ。

しかし、特殊な力を備えている。

『幻想操作（イマジンオペレーション）』

その力は、ありとあらゆる幻想（異能）を操ることができる。

操る、と言っても、存在している異能の炎や雷を操れるのではなく、使えるようにと言ったほうが正しい。

一見便利そうな能力に聞こえるが、万能ではない。

この力の強弱（レベル）は、その場の感情に左右される。

つまり、感情の強さにより、使いたい異能の強弱（レベル）が決まる。九条龍也は無能力者だ。

凄いのか凄くないのか、よく分からない力だ。

そして、その副産物と思われる能力、

『幻想殺し（イマジンブレイカー）』

こちらは、「幻想操作」とは真逆の能力だ。

つまり、ありとあらゆる幻想（異能）を問答無用で打ち消すのだ。

例えそれが、そう、神の奇跡でも。

しかし、こちらにもデメリットはある。

この「幻想殺し」は、触れた幻想を打ち消すのではなく、限定条件があるのだ。

そう、右手にしか効果がないのだ。

右手に幻想が当たれば問答無用で打ち消されるが、右手以外――――正確には右手首より下――――に当たれば、もれなく挽肉（ミンチ）にしてくれる。

「（この右手って、俺くらいの無茶苦茶な身体能力がないと、意味ないよな……）」

龍也は、右手に視線を落としながら考える。

現在、月は上に昇って自己主張をしている。

つまるところ、夜だ。……いや、深夜だ。

通りの街灯も、ポツポツと道を照らしている。いつの間に大通りに出たのだろうか。

「こんな時間まで、何やってんだろ。俺。」

誰に言うわけでもなく、龍也は一人呟いた。

「ちょ、ちょっと。待ちなさいよ！」

「ん？ミコトか？」

自分の後から、息が切れているであろう美琴がやってきているのを見て、龍也は立ち止まる。

「ん？じゃないわよ！ちょ、ちょっとは待ってくれたって、い、いいでしょ！？」

「いや、１０億ボルトの餌食には、誰でもなりたくないだろ？」

息を切らせて、頬を若干赤く染め、服が乱れている美琴に冷静に突っ込みを入れる。

別に、美琴のことを恋愛対象としてみていないわけではない。

美琴は可愛いし、性格が強気なのが玉に瑕だが、好きなものがファンシーなものだったり、真っ赤になったときのギャップにはかなり思うことはある。

よって龍也は、現在理性を片っ端から総動員させて、押さえ込んでいるのだ。

「りゅう兄も少しは真面目に勝負してくれてもいいのに。」

美琴は唇を尖らせながら不満を漏らす。

その姿に可愛いッ！！と思った龍也は悪くないはずだ。

「いや、男として、女に手を上げるわけにはいかないだろうが。それで、今日はもう終いか？」

「まだしたいんだけど、残念ながら、電池切れよ。」

そうか。と、龍也は返事をしながら、とある物を指で指す。

「ところで、だ。あれは？」

「え？」

美琴は龍也の指差した方を、言われるがまま振り向く。

そこには、、、

『――――――メッセージ、メッセージ。エラーＮＯ．１００２３１－ＹＦ。電波法に抵触する攻撃性電磁波を感知。システムの異常を確認。電子（サイバー）テロの可能性に備えて、電子機器の使用を控えてください』

ぷすぷす、と。煙を噴いて歩道に横たわっているドラム缶型のロボットがあった。

次の瞬間、、、

リリリリリリリリッと、甲高い警報を辺り一面に鳴り響かせた。

「ふ、不幸だぁッー！！」

龍也は確認するなり、美琴の手を取り、走り出した。

後ろで美琴が真っ赤になって何か言っているが、龍也は気づかない。

※※※※※※※※※※※※※※※

「はぁ、はぁ、本当、どうなるかと思ったー……。」

「うぅ……、ごめんなさい。」

今回ばかりは美琴も反省しているようだ。

「それじゃ、送ってくよ。夜遅いだろ？」

「い、いいわよ別に。常盤台の寮も近いし。そ、それに、私はＬｅｖｅｌ　５よ？そこらのゴロツキなんかに負けるわけないでしょ？」

何を想像したのか、美琴はブンブンと否定している。

しかし、龍也は気づかない。

「Ｌｅｖｅｌ　５って言っても、今はＬｅｖｅｌ　０と変わらないだろ？電撃放てるのか？」

「う、」

「能力なにで、不良（スキルアウト）に勝てんのか？」

「うぅ」

「それに、寮の門限はどうするんだ？あそこの寮監厳しいだろう？」

「うぅぅぅ！！分かったわよ！送ってください！これでいいんでしょ！？」

逆切れもいいところだ。

本当は電気を放出したいのだろうけど、如何せん電池切れだ。

しかし、龍也はその表情をどう受け取ったのか、美琴の頭を撫でた後、美琴の手を取り歩き出した。

美琴は顔を真っ赤にしたままだ。

何故龍也が手を取ったのかは分からない。

※※※※※※※※※※※※※

「それじゃぁ、いつも通りのところに跳ばすな。」

「うん。」

何があったのだろうか。

美琴が素直だ。

「にしても、ミコトも手加減を覚えろ。無能力者ごときに、超電磁砲を使ってどうする？」

その言葉を聞くと、ミコトはムッっとしたような顔になった。

「りゅう兄はねぇ……音速3倍の超電磁砲を受け止める人を”無能力者ごとき”って言わないでしょ！？そ・れ・に！多重能力者（デュアルスキル）ってどういうことよ！能力は1人一つって決まってるものなのにーーッ！」

「否定はしないが……」

龍也はそう言った後、心の中でちょっと違うがな。と、付け加える。

「何でりゅう兄が無能力者判定なのよーッ！納得いかないわ！」

「俺の能力も、万能じゃないからな。」

何故、龍也が無能力者判定なのか。これには理由がある。

理由は、感情によって強弱（レベル）が変わることだ。

龍也は、身体測定（システムスキャン）と呼ばれる能力測定が、とんでもなく嫌で、

うわぁー、だりぃー、したくねぇー。と、いった感じで身体測定（システムスキャン）を受けているので、能力は良くて”発火能力者（パイロキネシスト）”なら、マッチの炎程度、”風力使い（エアロシューター）／空力使い（エアロハンド）”なら、そよ風程度、悪くて発動すらしないからだ。

いくら、あらゆる能力を扱えるということが漏れていても、この程度の出力なら無能力判定になるに決まっている。

ちなみに普段なら、”強能力者（Ｌｅｖｅｌ　３）”程度の出力は出せる。一部の能力は”大能力者（Ｌｅｖｅｌ　４）”は出る。

「じゃ、お休み。」

「うん。りゅう兄お休み。」

龍也はそういった後、美琴を”空間移動能力（テレポーター）”で、美琴の部屋に送った。

「・・・・・帰るか。」

龍也も自分の寮に帰っていった。

——龍也は元から能力を持っている人「原石」で、

——その能力は超能力なのか、

——それすらも分からない。

——幻想を創る能力、『幻想操作（イマジンオペレーション）』

——幻想を殺す能力、『幻想殺し（イマジンブレイカー）』

——この二つが、何故一人の器に共存できているのかは分からない。

——その少年は、その力で、その世界で、

——何を思い、何を為し得るのだろうか。

少年の幻想（モノガタリ）は始まったばかりだ。

とある一人の幻想操作　～プロローグ～（後書き）

はい！プロローグでした！

どうでしたか？とりあえず、主人公が美琴にフラグを立てたことにしました。

しかも、兄って……

自分でも何がしたいか分かりません。

しかも、主人公チート……

自分でやったんですけどね！

ぶっちゃけると、これは作者の思いつきで展開していってます。

セリフ、行動も、その場の思いつきですしね！

作者は超電磁砲の原作、つまりはコミック、マンガの方ですが、の知識がないので、ｗｉｋｉとアニメを頼りに展開していきます。超電磁砲はですが。

禁書目録は、原作一応もっているので（↑もってるのに１５巻までしかまだ読んでないというｗｗ）禁書は原作主体でいきたいと思い

ます。

次は三人称視点ではなく、主人公の一人称視点で始めます。

書いてて思ったんですけど、描写って難しいですね！

ＰＳ．後書きが長すぎる件についてｗｗｗ

1年！七組！小萌先生ーーッ！！（前書き）

第1話、投稿しました。

何故だろう？書いてるときは、こんな風になるつもりはなかったのにーーーッ！

自分でもどうしてこうなったのか分かりません。

だが自重しない！（↑ここ重要）

ＰＳ．サブタイトルの表記ってよく使われてるよね！

３年Ｂ組の奴だったり、ネギ〇だったり、らき☆す〇のオープニングの奴だったりさ。

1年！七組！小萌先生ーーッ！！

ｓｉｄｅ龍也

「ふ、不幸だぁーーー！！」

俺は隣の部屋の声で目が覚めた。

声で分かると思うが、上条さんの声だ。

はい、不幸だ。いただきました。

俺も「幻想殺し」を持っているので、不幸になる筈なのだが、俺の場合は「幻想操作」により、不幸にはなっていない。

幻想を操作し、神の加護を殺されないようにし、加護を増幅する。

いいだろう！俺は不幸にはならないぜ！寧ろ幸運になるぜ！

こんな力は高度演算が必要みたいだが、何故か俺の演算能力が高いみたいだ。

そう、それこそ天気が予言できるくらいに、だ。

まさに「樹形図の設計者（ツリーダイヤグラム）」の演算能力だ。

チート万歳！

だが、俺自身の演算能力が高いと言っても、俺が意識的に演算しているわけではない。

例えば、「明日の天気はなにかなー……晴れか。」といった具合で、イメージや、考えると演算が行われているみたいだ。

所謂自動演算。

っと、無駄話はこのくらいにしないとな。

俺は洋服を制服に着替えて、ご飯を食べる。

すると、扉の前がどたどたと騒がしくなった。

「登校時間まであと１０分！上条さんは間に合って見せますよ！！」

ダダダダダダッ！！

朝から騒がしいな、上条の奴は。

え？俺は良いのかって？

それは俺は今日が転校日だからさ。転校生は、１時間ほど遅れて登校だとよ。

え？聞いてない？だって言ってないもん。因みに上条さんはまだ知り合いじゃない。

さてと、ゆっくり行きますか。

※※※※※※※※※※※※※

空を見上げれば、電子板が宙を漂い、最新のニュースを流している。

さて、皆さんは転生ということをご存知だろうか。

転生とは、死後に別の存在として生まれ変わること。肉体・記憶・人格などの同一性が保たれないことから復活と区別される。

何故このようなことを言い出したかというと・・・・・

転生しました／（＾ｏ＾）／

いや、転生というよりも、憑依の方が正しいかもしれないな。前世の記憶があるし。

しかも、転生先が「とある」の世界という。

はいはい、チートオリ主乙ｗｗｗ

そう言えば、なんで俺がこんな時期に転校したかだけど、俺の能力を研究しようとする研究員（バカ）がかなりいてさ。

あちこちの研究所を転々としていたわけだよ。

何しろ、諦めの悪い奴らがたくさん居てさ、あっちこっちの学校と学区を移動して、実験の繰り返しさ。

何とかして俺の出力を上げようとしてたみたいだけど、俺のやる気がないから無理だしね。

「ん？なにしてるじゃん？」

おっと、考え事をしてたら着いたのか。ってかこの声……

「そこ、そこの君！登校時間はもう終わりじゃんよ？堂々と遅刻なんて、なかなか良い度胸してるじゃん。」

やっぱりあなたですか。美人ジャージ先生。

本当にプロポーションの自覚あるのか？

「違います先生、今日から転校の九条です。」

「あー、君が転校生の……それなら職員室に行くじゃん。小萌先生が待ってるじゃん。」

あー、あの合法ロリ先生か。

「分かりました、先生。」

「急ぐじゃんよ。」

俺はさっさと門を潜り、ロリ先生――――――もとい、小萌先生のいる職員室に急いだ。

※※※※※※※※※※※※※※※

「あなたが、転校生の九条ちゃんですかー？」

今俺の目の前には、明らかに小学生のような先生がいる。

「そうです先生。」

「先生のことは、小萌先生と呼んでくださいですー。」

「分かりました小萌先生。」

「先生は素直な子は好きですよー？はぁー、上条ちゃんと土御門ちゃんもこのくらい素直な子だと先生は助かるんですがー……。」

先生！不幸少年や妹好きに言っても無駄だと思います！

さすがは、”クラスの三バカ（デルタフォース）”の二人だぜ！

幼女先生も大変だな。

「むむ、九条ちゃん。今失礼なことを考えませんでしたかー？」

「勘違いじゃないですか？小萌先生。…クラスに着きましたよ？」

「むむむ、話を逸らされた気がしますが、まぁいいですー。先生に呼ばれたら入ってきてほしいですー。」

小萌先生はそう言って中に入っていった。

※※※※※※※※※※※※※

ｓｉｄｅ上条

俺、上条　当麻はいつも不幸だ。

そう、どんなときでも不幸だ。

宝くじを買えば必ずハズレるし、道を歩けば棒に当たる。

例えば――――――

「ふぁぁぁぁ。よく寝た。そういえば、今何時だ？」

時計を確認する。

短い針は８で、長い針は３を指している。

「ふ、不幸だぁーー！！！！」

――――――目覚まし時計が鳴らなかったりとか。

時間はない。５分で着替えて、その間に焼いたパンを銜えて走り出した。

ガチャリとドアを開けて、陸上部も真っ青な速度で走り出した。

空は忌々しいくらいに青い。

畜生、不幸だ。

※※※※※※※※※※※※※※※

キーンコーンカーンコーン。

結果から言おう。間に合わなかった。

HR（ホームルーム）真っ只中の教室に駆け込んで、小萌先生から笑顔で説教された。

何やら羨ましそーにしている、鬱陶しい視線を2つほど頂いたが、俺、上条さんには関係ないと信じたい。

「カミやんは朝から不幸全開だぜぃ。」

机に突っ伏していると、声を掛けられた。

声を掛けてきた少年は土御門　元春という少年だ。

クラスの委員長から”クラスの三バカ（デスタフォース）”なる称号を貰った、バカその1だ。

不本意ながら、上条さんもその一角を貰っている。

「なな、カミやん。朝から小萌先生の説教だなんて羨ましすぎるねん。ボクも小萌先生に説教されたいねん。」

こちらは、青髪ピアスだ。エセ（↑ここ重要）関西弁のこいつもまた”クラスの三バカ”の一角である。

「黙れ、エセ関西弁！上条さんかて、遅れたくて遅刻したんじゃありませんよ！」

「えええええ、エセちゃうねん！ボクはホンマに大阪人やねん！」

エセが何を言うか、と思うが口には出さない。

何か言うと、不幸になるのが上条さんの体質なのだ、まる。

「そういえば、転校生が来るらしいにゃー。今日職員室で小萌先生が言ってたぜぃ。」

あなたは何故職員室に、それも小萌先生の話を聞いていたのでしょうか？と聞きたくなったが、やはり口にはしない。

何度も言うが、そんな事をすれば、不幸になるのが上条さんなのだ、まる。

土御門の話に反応したのは青髪ピアスだった。

「そうやねん！そうやねん！ボクの情報によれば、転校生は女らしい！しかも、美人！」

「青髪、素がでてるぞ、素が。」

青髪ピアスは、興奮するとこのようにメッキがはがれるのだ。

だからエセ。

「転校生が来るのは確からしいぜぃ。性別を聞く前にバレてしまったのにゃー。」

本当に残念そうだな土御門。

上条さんには、どうせ出会いなんてこないですよー。

「転校生は、とにかく来るんだろ？その時、分かるじゃねぇか。」

「甘い！甘いねんカミやん！転校生がもしも、ロリだったらどうすんねん！」

「違うぜぃ、転校生はやっぱり妹キャラだにゃー。」

「嫌、両方違うだろ。」

やれメイドさんだの、やれロリだの、ギャーギャー五月蝿い二人は放っておいて、小萌先生をまつことにする。

「はーい。皆さん席に着くですー。１時限目の授業をはじめるですー。」

と、そこに小萌先生が戻ってきた。

やはり、いつ見ても小学生にしか見えない。

バカ二人は小萌先生が入ってきた瞬間、神速で席に着いた。

何故だろう、どうやったらあんなに早く行動できるのだろうか。

「授業を始める前に、連絡があるですー。今日はなんと、転校生がいるのですー！」

とある二人から凄い熱気を感じるんですけど。

「喜べ女子共！歯を食いしばりやがれ男子共！ですー。九条ちゃん入って来てくださいですー。」

そう言われて入ってきたのは、結構・・・いや、かなり美形の男だった。

身長は１７０ｃｍを超えていて、髪は長めでポニーテルみたいにし

て縛ってある。顔立ち整っていて、あれ？ヘタしたら女に見えんじゃね？ってくらい美形だ。

「「ちくしょおおおお！！！」」

あ、めっちゃ悔しがってる。

まぁ、どんまい！

※※※※※※※※※※※※

「「ちくしょおおおお！！！」」

俺が教室に入ってきた時に、聞こえた第一声がそれだった。

間違いない、ロリコンにシスコンだ。

・・・・いや、お前ら、地面に手を当てて悔しがるとこじゃないから、手が痛くなるだけだから、地面を叩くな。

「それじゃぁ、九条ちゃん。自己紹介をして欲しいですー。」

「あ、はい。分かりました。」

ロリ先生からもあいつらに何か言ってあげてくださいよ。

めっちゃ鬱陶しいんだけど！？

「あー、まぁ、九条　龍也だ。九条でも、龍也でも、適当に呼んでくれ。ｘｘ高校からの転校だ。宜しく頼む。」

「それじゃぁ、九条ちゃんは、上条ちゃんの隣の席ですー。あ、上条ちゃんは、あそこのツンツン頭なのですー。」

おー、生上条さんだ。初めて見た。

「ま、よろしく。」

「おう。」

取り合えず、挨拶はした。

いやー、これだけで分かるけど、あなたの人格は神だ！

「それでは、授業を始めるですー。九条ちゃんは、上条ちゃんに教科書とか見せてもらってくださいですー。」

「分かりました、先生。」

まぁ、前世は大学卒業してたがな。

※※※※※※※※※※

「九条って頭いいんだな。」

「まぁ、、、な。」

大卒ですから。

現在、学校終わって帰宅途中だ。

因みに、土御門は何やら舞夏がどうのこうの言いながら帰っていった。

青髪ピアスは、同人誌がどうのこうの言ってたな。

時間は４時過ぎだが、流石は時期が夏なことがある。まだ明るいぜ。

「九条様！今度勉強を教えてください！」

「いや、頭下げるような事じゃないだろ。部屋、隣だしな。それと、龍也でいいぜ。」

「え！？隣なの！？」

「朝、不幸だって叫びながら走ってたのお前だろ。」

「そ、そう言えば・・・・」

「不幸だーって大声で叫ぶの当麻くらいなもんだろ」

「返す言葉もございません・・・・・」

当麻も不幸だよな。見てるこっちは可哀相になる。

今日だけでも、落ちたシャーペンを拾おうとして踏んずけて壊したり、購買の品が直前で品切れだったり、両面印刷のプリントが当麻のだけ片面だったりと、不幸が重なりすぎだ。

と、曲がり角を曲がったところで――――――――

「あぁぁぁぁーッ！」

曲がった十字路の反対から、女性の声が聞こえた。

が、隣には当麻がいるので、どうせまた当麻がフラグを立てた女の子だろう、と決め付けて、気にせず歩いた。

「ちょ、ちょっと！聞いてますの！？あなたですの、そこのあなた！」

いやー、当麻は何人にフラグを立てれば気がすむのだろうか。

まったくもってけしからん！！

「お兄様！無視しないでくださいですの！」

だいたいなぁ・・・・ってお兄様！？・・・・・・そうか、遂に当麻も土御門に汚染されてしまったのか・・・・。

戦友よ！お前のことは明日の朝くらいまでは忘れない！

そう言えば――――――――

「お待ちなさいな！お話を窺いたいんですの！！」

「うわッ！？」

草むらから、ツインテール少女が、飛び出してきた。

・・・・・失敬。

目の前に、ツインテールの少女が現れた。

そう、虚空から。

と、言う事はだ。この少女は”空間移動能力（テレポーター）”という事になる。それも、自分の移動が可能な”大能力者（Ｌｅｖｅｌ　４）”だ。

お嬢様口調、空間移動能力、大能力者、ツインテール、導き出される答えは――――――――

「白井・・・黒子？」

「お、おおおお覚えてくれていたんですの！？黒子は！黒子は感激ですの！！！」

まずった！！思わず呟いてしまった！？

何とか立て直さなければ・・・！！そうしないと風紀委員（ジャッジメント）に入れられるッ！

「お兄様？なんで？」

「お兄様は、お兄様ですの。」

いや、意味分からん。

あれ？そういえば、ミコトがお姉様って呼んでくる後輩について愚痴ってこなかったっけ？お兄様フラグは折れたと思ったのに、何故だろう。ちくせう。

「っつか会ったことあったっけ？」

「え？あなたは私の名前を知っていたではありませんの。」

「いや、不良（スキルアウト）の噂で、空間移動能力者でお嬢様口調でツインテールの強い女の子がいるって聞いてたから。」

ピシッっと白井が固まった。

あー、なんかスゲー罪悪感・・・・・

「この殿方はちがいますの？いや、待つんですの黒子！嘘を吐いてるかもしれませんし、何より黒子！あなたの愛は、他人とお兄様を見間違う程度だったんですの！？いや、断じて違いますの！黒子は真実を吐かせて見せますの！」

・・・・・・なんかもの凄い葛藤をしていらっしゃる。

そうだ！今のうちに逃げろ！

と、当麻の居る筈の方を見てみると、、、、

居なかった。つまり、逃げられた。

見捨てやがったな！上条　当麻！不幸の匂いを嗅ぎつけやがって！

なんでこんなときだけ、当麻の勘は働くんだよ！？

よし、当麻も居ないんだし、気にせず逃げ――――――

「お待ちなさいな。何故逃げるんですの？」

手を掴まれて逃げれなかった。

くそっ！先手を打たれたか！

「何もなければ逃げる必要はありませんの。やっぱり、あなたはあの事件の時の殿方、お兄様ですのね？」

「あの事件？何言ってるんだ？俺は銀行強盗のことなんて知らないぞ？」

「あら、私がいつ、銀行強盗なんていいましたの？これで決定ですのね。」

墓穴を掘ったぁぁぁぁぁぁぁ！！

あぁ、これで俺の平穏生活が終った……

「さ、行きましょうですの。」

「え？どこに？」

「どこに？じゃ、ありませんの。支部にですの。お兄様は一応、あの事件の重要参考人ですので、支部にて話を窺う必要がありますの。着いて来て下さいまし。」

い、嫌だぁぁぁ！！

まだ、あそこには行く訳には行かないんだ！具体的には原作前に！

「なぁ、白井、俺には、九条　龍也って名前があるんだけど、お兄様ってのやめてくんない？」

「お兄様は、お兄様ですの。ですので、九条だろうが龍也だろうが、田中だろうが、お兄様ですの。どっちでもいいではありませんの。」

「よくねぇよ！？主に俺の精神的に！！」

「ささ、行きますの。」

「って俺の手を引っ張って進まないでくれる！？どこからそんな力が！？」

「仕方ありませんのよ、お兄様。どういう訳か、お兄様には私の能力が効きませんので、こうするしかないんですの。」

「そういう問題じゃねぇよ！！」

あぁーーーーもう誰か！！

不幸だぁーーーーーッ！！

1年！七組！小萌先生ーーッ！！（後書き）

はい、第1話でした。

今回は上条視点も入れてみました。

青髪ピアス・・・お前ってやつは！！

関西弁が分・か・ら・な・い！！

無理です。作者の限界です。

黒子にも、フラグを立ててみました。

最初はそんなつもりなかったのに・・・・・まぁ、美琴お姉様フラグは折りませんでしたが。

作者・・・お前は、妹が好きなのかッ！？

違います。ロリコンではありませんし、シスコンでもありません。フラグ先が年下なので、「兄」にしてみました。

え？言い訳だって？断・じ・て・違・う！！

まぁ、「俺の妹がこんなに可愛いわけがない」は、好きですね。個

人的に。

アニメもあるんで見てください。

っとまぁ、こんな感じですね。風紀委員に入れるかどうかは、これから考えるつもりです。ストーリにかかわるんで。

意見があれば、どうぞ言って下さい。

あと、いつかオリキャラを入れようと思います。転生者です。

あ、でも、「とある」のことは、まったく知らない設定です。何か希望能力があれば、言って下さい。

因みに、女で、上条のことが気になる、程度の設定にしたいですね。

では、また次の更新日に。

さよならー、さよならー、さよならー。

とある7月16日の身体測定（前書き）

はい、第2話投稿しました。

今回は投稿が、かなーーーーーり遅れてしまいました。申し訳ありません。

…最近忙しいんですよね。

テストとか、進路希望とか、またテストとかで……。

やってられっか！！って投げ出すところでした。

そん中、時間の合間で書いたこの話。

少々ストレスでおかしくなっているかもしれませんが、

それでは、第2話をどうぞ。

とある7月16日の身体測定

７月１６日――――――――

とある科学の超電磁砲の開始だ。

原作介入ｋｔｋｒ！

うわぁ！ちょ、ごめんなさい！もうそんな事言わないから石投げないで！

……ふぅ。

取り合えず、昨日の白井には諦めて、帰ってもらいました。

まぁ、逃げられないように、携帯のアドレスに、電話番号に、寮の部屋の座標まで教えたけれども。

で、今俺がその大事な１６日に何をしているのかというと、学舎の園を歩いています。

ちょ、まって！早まるな！アッーー！！

学舎の園にいるのも理由があるんだよ。

俺はいつも身体測定(システムスキャン)をするときに、大規模施設を使うんだけど、丁度、使える大規模な施設がなくてね。

それで、数少ない使える施設が常盤台中学だったわけさ。

もうね、聞いたときは、何の陰謀かと思ったよ！

ま、身体測定を生徒の誰にも見られないのが救いかな。うん。

と、言うわけで、学舎の園を歩いている訳さ。

もう、通行人の視線が痛いのなんのって・・・・いくら男が珍しいからって、ヒソヒソ話とかしないで！

もうやめて！俺の精神(ライフ)はもうゼロよ！

※※※※※※※※※

俺はプールに来ていた。

何故、プールかと言うと、どんな能力を使うか聞かれたので、火系統能力を使うと答えたからだ。

まぁ、確かに、もしグラウンドが焦土になったら困るからな。

俺が一回苛ついて、実験中に放った炎が、研究所を爆破したのを聞いてるみたいだ。

良かった良かった。

『――――記録、砲弾射速、秒速１０３０ｍ。連発能力、毎分８発、着弾分布１８．９ｍｍ――――総合評価、Ｌｅｖｅｌ５』

お、やってるね。これはミコトか。

まぁ、超電磁砲の１話みたいに、バンバン水柱があがってたしな。

「まずまずね。」

次が俺の測定なので、取り合えず、独り言を呟いているミコトの後ろに立つ。

「よっ！ミコト」

「ひゃわっ！？」

おー、可愛い声して驚くんだな。

「な、ななな何でここに居るのよ！？りゅう兄！？」

「いや、何でって身体測定しに来たからに決まってんだろ。」

「へ？」

「まぁ、わざわざこんな施設でやる必要はないんだけどな。上の方が五月蝿くてさ、自分の担当の研究所がぶっ壊されたのが嫌だったんだろうな。」

ま、普段はそんな力出せないけどな。と、後に続けて言った後、さっきまでミコトが立っていたところに立つ。

ま、今回は、ある程度の実力を出しますか。

無能力者って言われ続けるのには飽きたし。

「りゅう兄頑張ってーー！」

訂正！めっちゃ頑張ります！やる気が出てきたァァァァァァ！！

「それでは、始めてください。」

ふっ、見よ俺の力を！他世界干渉をしての、力の行使を！

いくぜ！先ずは”印”を組む、そして大きく息を吸い込んで、龍を象った、炎を噴き出す。名付けて――――――

”火遁、火龍炎弾”

ちょ！？ごめんなさい！まんまＮＡＲＵＴＯの忍術です！！だから石をなげないでーっ！！

放たれた龍炎は、とてつもない温度の炎を保ちながら、プールの水を蒸発させる。

しかし、床はこげないように操っている。他人になるべく迷惑はかけないぜ！！

・・・・・ごめんなさい！女子中だからです！！だから止めて！！

ふっ、身体測定の係りの人の顔が引きつっているが、今の俺は自重の文字を知らないぜ！こっからが本領だ！

俺は放たれた幻想（ニンジュツ）を操り、圧縮していく。

球体になるように、小さく――――小さく――――小さく。

来たッ！ここだァーーッ！

圧縮されていた炎の塊を、円柱状に範囲指定して、一気にドカンと開放する。

「ズガァァァァァン！！！」

とんでもない爆音と震動を巻き起こして、炎柱が空に向けて高々と上がる。あまりの高温にプールの水が一気に蒸発し、それでできた水素と酸素が結合、連鎖を起すように爆発を巻き起こす。

まぁ、傷つけないように守ってるけども。

『――――平均温度、約セ氏６０００度、瞬間最高温度、約セ氏３万度、炎操作率、全体の１００％、能力発動までの時間、０．０３秒、次元干渉確認、次元干渉レベル、測定不能。能力制御率１０％未満――――――――総合評価、測定失敗』

あるぅぅ～？

実力出しすぎたと思ったんだけど、測定失敗？まさかまた測定しろと？

冗談だろ？

ほら見ろ！能力測定の係りの人が腰を抜かした上に、口元が引きつってるじゃねぇか！

俺の後ろでも、納得いかない！って感じで叫んでいる人が１名ほどいるしさ。

俺だって分からねぇよ！あれどう見たってＬｅｖｅｌ　５の火力だろ！何だよ能力制御率って！しかも１０％未満！嫌がらせか！？そのせいで能力測定失敗判定なのかーーッ！？

あーもう！こんちくしょう！不幸だーーーーッ！！

※※※※※※※※※※※※

ｓｉｄｅとある測定係

私は目の前の光景が信じられなかった。

現在測定中のこの少年は、なにやら特別なのは知っていた。上の意向があって、特別な能力測定機が与えられたからだ。

資料を見たときは、無能力者となっていたので、そんなことをする必要性を感じなかったのだ。

ところが、だ。目の前の光景は何だろうか。

空の雲を貫かんばかりの火柱があがっており、平均温度、約セ氏６０００度、瞬間最高温度、約セ氏３万度ときた。人体が溶けはじめる温度どころの話ではない。

しかし、熱風がこちらにまったく来ないのだ。当たれば火傷必須の熱風は、全てあの少年により操られている。まわりの被害も、まったくといっていいほど存在していない。

それで、能力測定失敗とは、どういうことだろうか？また、あのレベルの能力を測定するために行使させろと？

あぁ、自分の顔が引きつってるのを感じる。

「す、すみませんが、測定失敗のようですので、もう一度お願いします。」

自分の同僚が顔を引きつらせながら言っている。声が震えているのは気のせいではないだろう。

「分かりましたー。」

そう少年が言うと、思わず身構える。

「――――――――」

少年が何かを呟いた。

すると、虚空に向かって突き出した右手に、1本の剣が現れる。

その剣は、とても禍々しいオーラを放っており、ただの剣ではないことを証明している。

「裏切りにみてる枝（レーヴァテイン）」

少年が剣先を空に向け、そう言った。

瞬間、剣が文字通り、火を噴いた。

剣は炎になり、空に向けてゴウッと唸りを上げながら突き進み、雲に穴をあけた。

『――――――記録、平均温度セ氏２万度、瞬間最高温度測定不可、炎操作率、全体の１００％、能力発動までの時間、０．０１４秒、次元干渉確認、次元干渉レベル、測定不能。能力制御率１２％――――――総合評価、ｌｅｖｅｌ　１』

何なんだこの結果は・・・！

こんな結果聞いたことがない・・・・・

機械が測定値を測り間違えたと言われたほうが、まだ皆納得できるだろう。

ｌｅｖｅｌ　１？あれは明らかにｌｅｖｅｌ　５だろう？何でだ？

そう言えば、特別製の能力測定器って・・・・

・・・・何を基準に測定をした？

「ボソッ　流石は、世界を滅ぼす剣。最低出力なのに火力がハンパネェ・・・・・・。」

少年が何か呟いたようだが、こちらまで聞こえなかった。

あれは、超能力だが超能力なんかじゃない。

そう、あれはまるで――――――――

――――魔法のようだ。

※※※※※※※※※※※

ｓｉｄｅ三人称

ここは常盤台中学のグラウンド。

今日は、身体測定（システムスキャン）とよばれる、超能力の力（レベル）を測定する日だ。

そのグラウンドの一角に、１人の能力者が立っていた。

名前は、白井黒子。

常盤台中学１年生で、風紀委員（ジャッジメント）と呼ばれる組織に属しており、”空間移動（テレポーター）能力”の能力を所持している、”大能力者（ｌｅｖｅｌ　４）”だ。

そして、今、身体測定（システムスキャン）を行っている。

彼女――――白井は、近くにある重りに手を伸ばし触れる。

そして、演算を開始した。指定された位置に重りが跳ぶように。

フォンっと、重りが消え、視線の先にある指定位置の近くに現れ、ズドンと落ちる。

『――――記録、７８ｍ２３ｃｍ。指定位置との誤差、５４ｃｍ。――――総合評価ｌｅｖｅｌ　４』

測定係りの人がそう告げると、白井はため息を吐いた。

「はぁ……、調子が今一つですの。やっぱり昨日の風紀委員(ジャッジメント)のお仕事が影響して――――「うっふふふ、そんな言い訳なさるようでは、先は見えておりますね、白井黒子さん？」……婚后光子(こんごうみつこ)」

白井が一人ため息を吐いて呟いていると、隣から話しかけられた。

婚后光子と呼ばれた少女は、左手で花の絵が付いている緑色の扇子を広げ、口元を隠している。

それに対する白井は、何やら胡散臭いセールスマンを見たような、いやーな顔をしている。

「この分だと、”超能力者（ｌｅｖｅｌ　５）”に到達するのは、私(わたくし)のほうが先かしらぁ？」

そんな、白井の目を気にせず話す婚后。

いや、気づいてないだけかもしれない。

「ふんっ！私(わたくし)とあなたの能力を一緒にしてほしくはありませんの。」

白井はそっぽを向きながらそう話す。

２人は敵を見たときのような嫌悪感をだしているが、意外と仲がい

いのかもしれない。

そして、白井は続ける。

「――――大体、３次元と１１次元では空間把握法が根本的に「元々私、１年の分際で大きな顔をするあなたが気に入りませんの。よろしくて？」・・・相変わらず人の話をききやがりませんの。」

白井は拳でグーを作り、思いっきり怒りをあらわにしている。

対する婚后は、やはり白井の感情に気づいていない。

「この私が常盤台のエースとなった暁には「ズドン！！！」ッッ！？」

婚后が、白井に一方的な会話をしていると、プールの方で、かなり大きな地響きと、どでかい水柱ができる。

そのあまりのでかさに、思わず飛び上がり、尻餅を搗いてしまった婚后。

周りの人も、何？爆発？と、ざわめいている。

それも当然だろう。それほど大きな音だったのだから。

対する白井は、どこか誇らしげだ。

「いッ……ーッ！ん、何事ですの？」

地に着けていた手を頭に当て、体を上げる婚后。

白井の方は、体が揺れただけで、それ以外被害はないようだ。

「ふんっ！今年度から2年に転入してきたあなたはご存知ないかも知れませんが――――――」

婚后は、隣から聞こえてきた白井の声に、珍しく耳を傾け、そちらを見る。

それほど気になったのだろうか。

「――――今、あのプールで能力測定されているのが、常盤台のエースですわ。」

白井の言葉に続くように続けて上がる水柱。

その間も語る白井は、やはり誇らしげだ。

こういうのを、虎の威を借りる狐というのだろうか。

「プールの水を緩衝材にしなければ、まともに計測もできないほどの破壊力。……あの一撃を真正面から受ける覚悟があなたにあって？」

思わずそちらを向いた婚后。

そこには今も、トンでもない音を出し続ける水柱がそこにあった。

思わず息を呑んだ婚后。

そこで水柱は終わったが、その水柱の影響で飛んできた水しぶきはそのままだ。

「まぁ、もっとも、あんな馬鹿げた一撃を受け止めれる人はしりませんが。」

そう語る白井。だが、それは嘘だ。

そう言っている脳裏に浮かぶのは、白井がお兄様と呼んでいる少年だ。

昨日再会したばかりで、いろいろあって、彼には多大な恩があり、憧れがあり、好きでもある少年だ。

その少年に話を聞くため連行しようとしたところ、自分の能力である空間移動（テレポート）が効かなかったのだ。

「（なんですの、あのでたらめな能力は・・・・）・・・・・はぁ。」

「？」

白井は人知れずため息を吐いた。その様子を婚后は疑問に思って首を傾げた。

白井の空間移動（テレポート）は、触れたものにはなんでも効くが、それには例外が存在する。

その例外とは、自分と同じ空間移動系の能力者だ。

いや、正確には自分と同系統のＡＩＭ拡散力場なるものを発している人だ。

ＡＩＭ拡散力場。

正式名称はＡｎ｜Ｉｎｖｏｕｎｔａｒｙ｜Ｍｏｖｅｍｅｎｔ拡散力場で、直訳が無意識の動きとなっている。

『Ａｎ｜Ｉｎｖｏｕｎｔａｒｙ｜Ｍｏｖｅｍｅｎｔ』は『無自覚』ということであり、　能力者が無自覚に発してしまう微弱な力のフィールド全般を指す言葉だ。

電撃使いの場合、微弱電波として表れ、念動力なら、能力で圧力として表れ、発火能力なら熱量で表れる。

ＡＩＭ拡散力場はとても微弱で、精密機器を使わなければ人間には

観測できないレベルであるが、千差万別の力や種類を持つ現実に対する無意識の干渉であるこの力場を探ることで、能力者の心や『自分だけの現実』を調査することもできる。

研究を進めれば「ムッ、能力者の気配がするぞ」「ムッ、奴の戦闘力は５３００００だな」といった、

少年マンガよろしくな探索も可能であり、その実現を専門とする研究者や、ＡＩＭ拡散力場を利用して能力者の位置を探ることを可能とする能力者『能力追跡』や、ＡＩＭから能力本体やパーソナルリアリティに干渉する『ＡＩＭジャマー』など存在するが、詳細は割愛しよう。

まぁ、ともかく、その意味不明な力が邪魔で、同系統のＡＩＭ拡散力場を発している人物は空間移動ができないのだ。

しかし、だ。白井はその少年が空間移動能力者ではないことを、過去の事件で知っている。

それで聞いてみたところ、「ん？俺の能力は「幻想操作」っていう能力で、その副産物らしき効果で「幻想殺し」っつー能力が右手にあるんだ。「幻想殺し」はあらゆる異能を打ち消すから、その効果で空間移動ができないんだろ。」などという、とんでもない返事が返ってきたのだ。

白井は再びため息を吐いた。

と、その時、、、、

「ズガァァァァァン！！！」

再び、とんでもない爆音が轟いた。

びっくりして皆そっちに振り返る。

するとそこは、先ほどもどでかい音を出していた発信地で、プールだった。

驚くのはそこではない。そのプールから、空を突き抜けんばかりの炎柱が存在していたのだ。

炎のあまりの熱のせいで、蜃気楼が発生し、空間が歪んで見える。

「「なっ！？」」

声をそろえて驚きを表す白井と婚后。

なぜならそれは、ｌｅｖｅｌ　５並の力を行使していることになるからだ。

しかし、それだけではそこまで驚く要素ではない。

では、なぜ驚くか。

「”発火能力（パイロキネシスト）”！？いいえ、でも発火能力のｌｅｖｅｌ　５なんて聞いたことがありませんわ！！？」

そう、そこなのだ。”超能力者（ｌｅｖｅｌ　５）”はかなり有名で、どうしても名前と能力名が漏れてしまうのだ。

そう、そんなにも有名なのにもかかわらず、発火能力の超能力者など聞いたことないからだ。

「まさか・・・・・新しい超能力者（ｌｅｖｅｌ　５）！？」

白井の隣で婚后が勝手に驚愕しているようだが、白井は無視だ。

考えていたのは、お兄様と呼んでいる少年だ。

「（あらゆる異能を打ち消す幻想殺し・・・それでは、幻想操作はなんですの？まさか・・・”あらゆる異能を扱える”なんてことはありませんわよね！？いや、ありえませんわ。そんな夢のような能力など・・・ありえませんわよね？）」

自分で否定しておいて、自信のない白井だった。

すると再び、炎が上がった。

明らかに先ほどよりも熱いであろう炎は、雲を突き抜けた。

先ほどよりもかなり広い規模で蜃気楼を発生させており、空間が歪んでいる。空を飛んでいるかもしれない飛行機を心配するほどのでかい規模だ。

何万度とあるかもしれない温度が視認できるのは、おそらく能力による行使で、温度のみ変化しているからだろう。

「な、なんなんですのあれは……？」

白井の隣には明らかに腰を抜かしているであろう婚后の姿が。

白井はそれを見て笑い、

「分かりませんわ。」

とだけ言った。

因みに婚后がこの時白井にからかわれていたことに気がついたのは、これからしばらくしてのことだった。

とある7月16日の身体測定（後書き）

はい！第2話でした！

今回から超電磁砲が始まります。

まぁ、原作開始は早いほうがいいかなぁ～と、思って、過去編を省いた結果、原作開始が早くなりました。

まぁ、いつか節目に銀行強盗のやつなんか入れようと思いますが・・・・

主人公の能力・・・・・チート・・・・・

他世界の力をなぜ使えるか。

これに関しては、そういうものなんだ、チートなんだ。と解釈してください。

まぁ、一応、異能の類だからね。

主人公の能力を使っての忍術行使の際の、疑問。

チャクラどうした、チャクラ。

まぁ、これは、超能力として形だけ忍術を行使したと思ってください。

要するに、演算さえしていれば、チャクラなんかはいらないってことで。

印に関しては、術行使の次元干渉の際に入手した。と考えてください。

主人公がなぜｌｅｖｅｌ　１か。

これに関しては、主人公の能力でできることを考えると、あの程度はまだまだだから。まったく能力を使いこなせてないから。と、いうことを基準に測定した。と考えてください。

どうやって機械で次元干渉を確認したか。

ご・都・合・主・義

発・動！！！

・・・・・まぁ、どうしても納得のいかない方は、魔術的な何かをかけていたと解釈してください。

矛盾があれば、報告お願いします。

ＰＳ．銀行強盗をどうやってボコボコにしようか……

とある科学の超電磁砲　前編！・・・・最初は二つに区切るつもりはなかった（前書

龍也「問おう、何故更新がこんなに遅かった」

作者「・・・・・」

龍也「なるほど、ゲームをやりすぎていたと・・・・・」

作者「異論はありません・・・・」

龍也「アホか！」

作者「すみませんでした・・・・・」

・・・本当、すみませんでした。

とある科学の超電磁砲　前編！・・・・最初は二つに区切るつもりはなかった

ｓｉｄｅ三人称

今日は７月１６日の朝。

平日であるから、今日は学校であるのは当たり前なのだが、今日はいつもの日とは違う。

そんな今日、たくさんの生徒達が出入りしている中学があった。

まだ、時計の短い針は１２すら過ぎてないのだが、今日こんなに早く下校している人がいるのには、訳がある。

今日は身体測定（システムスキャン）なる行事が行われる日だ。

今日はどこの学校でもこの行事が行われており、どこの学校の生徒も、身体測定（システムスキャン）が終れば帰宅できるようになっている。

そして、そんな人達の１人である少女、初春飾利（ういはるかざり）は、メモを確認しながら鼻歌交じりで校門を出ようとしていた。

「ふっふふん～♪ふっふふん～♪」

そんな初春に忍び寄る一つの影があった。

初春はよほど気分がいいのか、まったく気づいていない。

そんな初春の背後まで忍び寄った影は、そ～っと背後から――――

――――

「う～い～は～る～っ！！」

――――ガバッっと、スカートを捲った。

「……ひぃっ！！」

スカートを捲られた被害者、初春自身は、急な出来事に固まっている。

人間とはそういうものだ。予想外で急な出来事が起こった場合、先ず固まる。

「おっ！今日は淡いピンクの水玉か～。」

初春のスカートを白昼堂々と捲った犯人の少女、佐天涙子（さてんるいこ）はと言うと、初春の気持ちなどいざ知れず、どんなパンツかしっかりと確認し、堂々と呟いた。

「キャァァァァァッ！！！」

事態を確認し、思考が起動した初春は、まず叫び声をあげた。

そして初春は振り返り、佐天に抗議する。

「い、い、いきなりなにするんですかっ！佐天さん！」

必死に講義する初春は顔が真っ赤だ。

周りの人たちはそれを見てヒソヒソと話す人もいる。

「おー、おー。クラスメイトに敬語とは、相変らず他人行儀だねぇ。」

初春が抗議しているのは、そんなことではないと思う。

しかし、佐天は何を思ったのかこう続けた。

「どれっ、親睦を深めるためにもう一回っ！」

「う、うわぁぁぁぁッ！！！」

朝方の校門で、本日二度目の哀れな一人の少女の悲鳴があがった。

因みに、その中学、柵川中学は女子中ではないため、しっかりと下校中の男子生徒に確認された。……南無。

※※※※※※※※※※※※

「はぁぁぁ……」

場所は変わって通りのベンチだ。

初春はそこに座るなり大きな溜息を吐いた。

「酷いですよ……」

「ごめんごめん調子に乗っちゃって。」

溜息を吐きながら酷いと言った初春に、佐天は右手で長い黒髪をかきながら謝る。

こればっかりは調子に乗る、乗らない、以前の問題だ。

親睦を深めるなどという理由でスカート捲りが公認されてしまったら、公前猥褻なる法律は生まれないだろう。

「代わりに私のパンツ見る？」

「結構ですよっ。もう、佐天さんは……」

佐天はそう言ってヒラヒラとスカートを揺すったが、初春はキッパリと断った。

確かにそういう問題でもない。

すると佐天は、おっ！っと、何かを思い出したのか、話題を変える。

話題から逃げたかったのかは、佐天しか分からない。

「そういやどうだった？」

「ん？どうって……？」

言いたいことが意味不明だ。

初春はそれを疑問に思い聞き返す。

「決まってるじゃん。身体測定（システムスキャン）。」

それに答えた佐天は、さも、当然っ！と、言ってる様に両手を腰に当てながら言った。

「あぁ・・・。全然駄目でした。相変らずの低能力者（Ｌｅｖｅｌ　１）。小学校の頃がらずっと横這いです。」

初春は身を竦めながらそう答えた。

初春自身は駄目駄目と言っているが、低能力者（Ｌｅｖｅｌ　１）は、この科学の街、学園都市では少ない者ではなく、寧ろ無能力者（Ｌｅｖｅｌ　０）と低能力者（Ｌｅｖｅｌ　１）と異能力者（Ｌｅｖｅｌ　２）が大半で、強能力者（ｌｅｖｅｌ　３）からはもうエリートの部類で、能力的には駄目だが、それが普通なのだ。

「担当の先生からも、『お前の頭の花は見せ掛けか！その花の満開パワーで能力地点も咲き誇れ！』って・・・」

「えっと・・・その担当の説教にも色々ツッコミたいとこだけど・・・」

佐天はなにやら困ったように返事をしたが、それが普通だ。ノーマルだ。

因みに、頭の花、というのは、初春のいつもつけている花飾りのことだ。本人は否定するが。

「まぁ、取り合えず元気だしなよ。」

「え？」

佐天がそう言うと、初春は顔を上げて、佐天の方を見た。

「だいたい、低能力者（Ｌｅｖｅｌ　１）ならまだいいじゃん？」

佐天がそう言うと、初春は顔を上げて、佐天の方を見た。

「あたしなんてＬｅｖｅｌ　０・・・無能力者だよ？」

「あぁ・・・」

佐天は手の指と指で丸を作り、言った。

佐天が慰めようとそう言ったところ、初春はバツが悪くなり、再び下を向いてしまった。

「・・・でも、そんなのは気にしない。」

「あぁ・・・？」

「あたしは毎日が楽しければ、それでオッケー。」

「佐天さん・・・。」

０の為に作った丸を使い、オッケーのサインを作る。

それを見た初春は笑顔になる。

「ほら、これ聞いて元気だしなっ！」

初春の耳元にイヤホンを持って行き、音楽を聞かせる佐天。

「あっ！一一一（ひとついはじめ）、これって・・・・？」

「先行配信した曲をダウンロードしたの。今日がこの曲の入ってるアルバムの発売日なんだ。」

「・・・・・ダウンロードしたのに、ＣＤも買うんですか？」

「初回限定版の応募券で、抽選１００名に当たるプレムアムグッツをゲットしてこそ、真のファンというもんでしょうがっ！」

「はぁ・・・・」

初春の疑問に、何やら力説する佐天。

そして、なにやらついていけない模様の初春。その感情は理解できないようだ。

「と言うわけで、一緒に買いにいくよっ！」

「あ、でも、今日は私、白井さんと約束が・・・・」

急に立ち上がり、興奮気味の佐天に誘われた初春だが、何やら先客がいるようだ。

「白井さんって、風紀委員（ジャッジメント）の白井黒子？」

「念願叶い、御坂さんに会わせてもらえる事になったんです！」

佐天に代わって、今度は初春が力説しだした。

初春は胸の前で手を合わせて、キラキラと目を輝かせている。

「学園都市でも、７人しかいない超能力者（Ｌｅｖｅｌ　５）！常盤台のエース、御坂　美琴さんに！」

「常盤台のレベルファイブぅ？どーせまた、能力を傘に着た、上から目線のいけ好かない奴じゃないのぉ？」

「そんなこと・・・・」

明らかに嫌悪感を露にする佐天に、反論しようとする初春。

「だって、ああいう人たちって、自分より下の人間を小バカにするじゃん？ムカつくんだよね、・・・・しかも、常盤台のお嬢様だなんて――――――」

「いいじゃないですかっ！お嬢様！いえ、寧ろお嬢様だからいいん

じゃないんですかっ！」

「ってあんた・・・単にセレブな人種に憧れてるだけなんじゃ？」

佐天の言うことは、一理ある。

「そ、そんなことないですよ？因みに、私の出身が西葛西だってことも関係ないですよ？」

果たして、どう思考したら出身地が関係するのだろうか。

「あ、そう言えば見た？常盤台の身体測定の掲示板。」

「常盤台の身体測定の掲示板？そんなのありましたか？」

初春は突然振られた話題に困惑したが、迷わず答えた。

「それが、今日立てられたばかりみたいで、かなり話題になってるのよねー。」

「へぇー、それって何なんですか？」

「何でも、とんでもない発火能力者（パイロキネシスト）だったり、物質創造（マテリアルクリエイト）だったり、何の能力か分からないみたい。」

「発火能力者（パイロキネシスト）って・・・朝方のアレですか？」

「らしいのよね。」

その言葉にえぇ～～！？っと驚く初春。

「それって、新たな超能力者（Ｌｅｖｅｌ　５）の誕生ですか！？」

そしてその後、初春は目を輝かせてそう言って目をキラキラと輝かせた。

「それが違うらしいのよね、その時の測定していた係りの人が言うかぎりは。」

「えぇ～～！？あれで違うんですか！？」

それってなにかの間違いじゃないんですか？と、続ける初春。

佐天も何か腑に落ちない様子だ。

「何でも、統括（うえ）理事会からの指示で詳しくは言えないらしいけど、何でも、能力使ってる姿が・・・」

「姿が？」

「魔法使いみたいだったってさ。」

「――――ブッッ！？」

「「うわっ！？」」

佐天が魔法使いと言った瞬間、近くで何かを噴出す音がした。

それに驚いた二人は、思わずそちらに振り向いた。

二人の視線の先には、１人の男の人が座っていて、持っていた飲み物を噴出していた。

それを見た二人は、取り合えず・・・・・

「「だ、大丈夫ですか？」」

話しかけることにした。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　龍也

俺、参上！

・・・ごめんなさい！調子に乗りました、謝りますからその拳をおろさないで！ちょっ！アッーー！！

ふー、ひどい目にあったぜ・・・

では、気を取り直して、どうも、龍也です。

身体測定（システムスキャン）が終ってからすぐに、原作介入のため、初春たちの所にきました。

え？なんで初春たちのところを知ってるかって？

そりゃ、校門から着けて来たに決まってるだろ。

え？変質者？何言ってるんだ。それはあくまで尾行であって（↑ここ重要）、ストーカーではない。

どっちも、同じだって？知るかんなもん。

で、尾行した結果、原作通りに話が進んでるなぁー。

そう思ってたときもありました。

「何でも、統括理事会からの指示で詳しくは言えないらしいけど、何でも、能力使ってる姿が・・・・」

「姿が？」

「魔法使いみたいだったってさ。」

「――――ブッッ！？」

おいおい！何だよ！魔法使いって！？確かに魔法は使えるし、魔術寄りの能力も使ったが（レーヴァテイン）、魔法使いなんて呼ばれるようなことした覚えないぞ！？

しかも掲示板立ってるのかよ！

くっ！口止めしておけばよかったぜ！

そこまで目立つつもりはなかったのにー！！！

「「だ、大丈夫ですか？」」

「大丈夫だ、問題ない。」

佐天と初春の二人が心配して聞いてくる。

うぅ、二人共優しいぜ！

そんな二人に対して、ネタで返してしまったけどな！

「それよりも、その魔法使いについて詳しく教えてくれないか？」

「ま、まぁいいですけど・・・・」

あ、私は佐天で、こっちの花の子が初春です。と、佐天はわざわざ付け加えながら教えてくれた。

「今日の常盤台であった身体測定（システムスキャン）であった話なんですけど、今日は他の学校の男子生徒が測定しにきていたらしく、詳しくは言えないらしいですけど、とんでもない炎を放ったり、虚空から武器を取り出したり、それを炎に変えたりしていたらしく、それが魔法みたいだって。」

「（そんな風に言われてたのか・・・・）」

俺が一人考えふけていると、不思議に思ったのか、佐天が話しかけてきた。

「あの、何でそんなこと聞いてきたんですか？」

何か噴出してたみたいですし。と、佐天は繋げて聞いてきた。

んー・・・・まぁ、この二人になら言っていいだろう。そっちのほうが、

原作に関わりがもてるし。

「実を言うと……」

「「言うと？」」

おい、何がそんなに気になるんだ。

か、顔近けぇ！

「その男子生徒は、俺だったりするんだ。真面目な話……」

「「え、えぇぇぇぇぇぇぇ！？？」」

うるさっ！耳元で叫ぶな！！

後半へ続く……

とある科学の超電磁砲　前編！・・・・最初は二つに区切るつもりはなかった（後書

はい、第3話でした！

今回は、殆ど原作通り進んでました。

最初は銀行強盗まで終らせるつもりだったんですが、あまりに展開が遅すぎたせいで、急遽、区切るという処置をとりました。

で、どうでしたか？

まぁ、聞くまでもありませんね。

オリジナル要素まったくなし！！！

ちょっと、主人公の通り名らしきものができただけですね。

しかも魔法使い・・・・安直すぎだろ！

まぁ、あえて、科学サイドでの通り名を魔術っぽくしてみました。

次回こそ、銀行強盗です。

中編になったりなんかしません……よね？

主人公設定（前書き）

主人公設定です。

主人公の能力がよく分からないとのことで、一応書きました。

どぞ。

主人公設定

名前：九条　龍也

性別：男

容姿：黒髪黒目、身長１７０越えで、長髪をポニーテールのようにしてゴムでとめている。顔立ちは整っており、中性的な顔立ちをしている。

詳細：転生者で、前世の記憶もち。前世はオタクで、結構な小説などを読み漁っていた。

死後転生し、とある魔術の世界にきた。過去の経緯で学園都市に行き、天然物（げんせき）の能力を使い、研究所でたらいまわしにされていた。

幼少期に美琴と知り合い、よく遊んでいて、年上ということで「りゅう兄」と呼ばれている。風紀委員（ジャッチメント）の白井黒子とも、例の銀行強盗事件で顔見知り、「お兄様」と慕われて（？）いる。

高校はかの有名な名称不明の高校に転校。その際に上条と土御門など、物語の主要な人物とも知り合った。

能力：「幻想操作（イマジンオペレーション）」

幻想操作は、ありとあらゆる幻想（いのう）を操る・使うことができる。ただし、その強さはその場の感情に左右されている。

プラスの感情だったりやる気だったりだと強くなり、マイナスの感情だったりすると、弱くなる。ただし、それにも例外が存在する。

例えば、やる気の場合、強ければ高くはなるが、低ければ弱くなるなど、威力が弱くなるのは、マイナスの感情だけではない。さらに、マイナスの感情でも、怒りなどの例外で強くなる場合もある。

そして幻想操作は、異能であれば、他世界、つまりはアニメなどの世界の力も行使することができる。とあるの超能力は感情に威力が左右されているみたいだが、他世界の力は、その力の使用者と同じ威力でだすことができる。それ以上も可。

何故、他世界の力は制限が無いのかは、後ほど出します。

アニメの力については、基本デメリットが存在しない（例外あり）。なぜなら幻想操作により、力のみを引き出しているから。

（例）

万華鏡写輪眼、視力低下なし。発動されるのは力のみ、リスクは捨てられた。正確には一族の他者の万華鏡を自分の目に取り込むことで視力が低下しない「永遠の万華鏡写輪眼」を使っているから。

時間停止、停止時間の老化は防げない。ジョジョなど。

直死の魔眼、死の直視による頭痛あり。ただし、ハイスペックなせいか、頭痛はそれほど感じない。原作の両儀式のような感じだ。

主人公設定（後書き）

一応こんな設定になっています。

矛盾・よく分からない点がありましたら報告お願いします。

即刻修正しますので。

……実を言うと、もっと書いてたんですよね。主人公設定。

間違って消してしまって……

俺のバカヤローッ！

すみません愚痴です。

とある科学の超電磁砲　後編！（前書き）

連続投稿です。

今回は超電磁砲の銀行強盗編を終わらせます。

主人公がかなり出張ってますが、どうか見逃してください。

作者の文才がないんです。こうじゃないと、主人公が能力行使できなかったんです。

マジすんません。

とある科学の超電磁砲　後編！

「私のファン？」

とある学区のファミレスにて、１人の少女が尋ねていた。

茶髪の少女の名前は御坂美琴。

この学園都市で、電撃姫の名を冠するビリビリ少女だ。

いつも通りの制服で、頬杖をつきながら話している。

「風紀委員（ジャッジメント）の第１７７支部で、私のバックアップを担当してくれている子ですの。」

対して返答しているのは、この学園都市の風紀委員をしている白井黒子だ。

赤いリボンを使ったツインテールに、お嬢様口調が特徴の少女だ。

能力は空間移動（テレポート）と、意外に鬼畜な能力だ。まぁ、もっとも、本性からすれば、これほどピッタリな能力はないのだが。

片手でコップを持ち、飲み物を飲んでいる姿は、様になっている。

さすがは常盤台といったところだろうか。

「一度でいいからお姉様にお会いしたいと、断るごとに・・・」

それを聞いた美琴は溜息を吐く。

美琴にはファンが多く、こういったことが多々あるのだ。

「お姉様が常日頃から、ファンの子達に無礼な振る舞いに閉口されているのは存じてますわ。」

溜息を吐く美琴を見た黒子は、そう言った。

そしてその後、こう続ける。

「けれど、初春は分別を弁える大人しい子。それに何より、私が認めた数少ない友人。」

ナルシストなのか、何なのかよく分からないセリフを言う黒子。

内容は、黒子にしては真面目な内容だ。

「ここは、黒子に免じて一つ。あ、勿論、お姉様のストレスを最小限に抑えるべく、今日の予定はこの黒子がばっちり――――――あっ！」

そう語りながら黒子が取り出した手帳を、美琴が奪い取った。

取られた黒子は声を上げる。

が、美琴はそんなことは気にせずに手帳の内容を読み上げる。

「何々？初春を口実にしたお姉様とのデートプラン。その一、ファミレスで親睦を深め、その二、ランジェリーショップ（勝負下着購入）、その三、アロマショッピング（媚薬購入）、その四、初春駆除、その五、お姉様とホテルへＧＯ。」

美琴が読み上げるたびに、冷や汗がダラダラと流れる黒子。

前振りが台無しだ。

「つまり、大人しくて分別ある友人を利用して、自分の変態願望を叶えようと・・・・・」

「い、いえ・・・あの・・・・」

言い訳をしようとする黒子だが、もはや悪あがきにもなってない。

「読んでるだけで・・・・・すんげぇストレス溜まるんだけどッ！」

頬の端を摘み、グリグリと引っ張り回す美琴。

相当ムカついたみたいだ。

開放された黒子は頬を両手で抑えてる。

「・・・まぁ、でも。黒子の友達じゃしょうがないか。」

「お、おおおーねぇさま！」

美琴の溜息のように呟いた言葉に、黒子は目を光らせて反応して、オリンピック選手もビックリな跳躍力で美琴の膝の上に乗っかり抱きつく。

「く、くろ「お姉様が黒子のことをそんなに思っていてくださったなんて！黒子はもう、もう！どうにかなってしまいそー！」」

慌てて注意しようとするが、黒子のテンションは最高潮だ。まったく聞いてない。

美琴がその様子に唖然としたまま、ふと外を見ると、頭にお花を飾らせた顔を真っ赤にしている少女と、その子に引き止められて驚愕した表情でこちらを見ている黒髪ロングの少女。そして、その隣にはよく知る少年の姿が。

その少年と自分の姿を確認するなり、美琴は無自覚で強烈な電撃を放った。

その日、ファミレスでツインテ少女の悲鳴が響きわたったとか。

※※※※※※※※※※※※

ｓｉｄｅ　龍也

目の前で強烈な雷撃が発せられたのは、今は昔。

今目の前には集合している超電磁砲のメンバー。

つまりっ！原　作　介　入　だ　！

今俺はっ！猛烈に感動しているっ！

「‥‥というわけで、とりあえずご紹介しますわ。こちら、柵川中学一年、初春飾利さんですの。」

右手を初春に向けながらミコトに紹介する白井。

言われた初春は緊張のせいなのか、顔が赤い。

「は、初めまして。初春飾利、です。」

緊張でタジタジな初春を、不機嫌な様子で見つめる佐天。

「それから――――」

「どーも、初春のクラスメイトの佐天涙子でーっす。何だか知らないけどついてきちゃいましたー。因みに能力値は無能力者（Ｌｅｖｅｌ　０）でーっす。」

「はわっ!?さ、さ、佐天さん!な、な、何を!?」

黒子の言いたいことを無言で察した佐天は、自ら自己紹介をした。

皮肉めいた紹介に初春は慌てる。

・・・感情表現豊かな子だなぁ。

エッチな発言を男子がしたら、頭から煙を出して気絶しそうだ。

「初春さんに、佐天さん。私は御坂美琴。よろしく」

「よ、よろしく」

「お願いします・・・」

予想と大分かけ離れたイメージで、唖然とする二人。

うむ、いい表情だ。

「「で」」

白井とミコトが同時にこちらを向く。

あら、嫌な予感・・・

「「何でりゅう兄（お兄様）がいるのよ？（いるんですの？）」」

……

「「りゅう兄？（お兄様？）どういうことかきっちり話してよ（くださいな）！」」

…オワタ＼（＾ｏ＾）／

※※※※※※※※※※

「へぇー、黒子とりゅう兄って面識あったんだ。」

場所は変わってクレープ屋の近くのベンチ。

俺の横では、ゲコ太ストラップを片手にクレープを食べているミコトがいる。

うむ、可愛い。

「私もお姉様とお兄様にそのようなご関係があったとは、存じませんでしたわ。」

「私としては、両方に面識がある龍也さんに驚きかも。」

白井・・・トッピングに納豆と生クリームはどうかと思うぞ・・・

え？佐天に名前で呼ばれてるって？

そりゃ、お願いしたに決まってんだろ。苗字で呼ばれるの違和感あったし、丁度いいだろ。

因みに、ゲコ太騒動と食べ比べ騒動はもう終わった。

「世間は狭いものなんだよ。」

「龍也さんが異常なだけです。」

なん・・・だと・・・？

まぁ、事実だけどｗｗｗｗ

「さすが、魔法使いなだけありますね！」

う、うがッーーーー！？

そんな笑顔で厨二な名前を言わないでーーーッ！？

「魔法・・・使い？まさか、お兄様が常盤台で身体測定をしていた？」

「そうらしいです。会ったときに言ってました。」

「お兄様？よく分からないので、聞きますけど、お兄様の能力って――――――「ズガァァァン！」！？」

白井が俺を問い詰めようとしたその時、爆発音が響いた。

・・・やっとか。もう来ないかと思ってたぜ。

後ろを振り向くと、防犯シャッターが爆発し、煙を黙々と上げている銀行があった。

そこからの、白井達の行動は早かった。

白井はクレープを一気に食べ、現場に向けて走り出す。

因みに、クレープを包んでいた紙はポイ捨てだ。

・・・・・・それでいいのか風紀委員。

「な、何なの！？」

「初春！警備員（アンチスキル）への連絡と、怪我人の有無の確認、急いでくださいな！」

「は、はい！」

白井はベンチを飛び越えて綺麗に着地し、スカートから風紀委員の腕章を取り出し腕につける。

それを見たミコトは白井に声をかけた。

「黒子！」

「いけませんわお姉様。学園都市の治安維持は私達風紀委員のお仕事、今度こそ、お行儀よくしていてくださいな。……お兄様もですわよ？」

ちっ、ばれたか。

まぁ、イレギュラーが無い限り無事解決だしいいか。

俺がこそこそと移動しようとしていたところを、白井に見つかり、注意を受ける。

それをジト目で見てくるミコト。何あんただけやろうとしてんのよ、と言いたそうだ。

「はい、そうです。第七学区触れあい広場前の銀行で、強盗事件発生。警備員の出動を要請します。」

初春はしゃがみこみ、すばやく携帯で警備員の出動要請をしている。

そして、その横には未だに呆然としている佐天。……大丈夫か？

そこで、もう一度爆破が起き、中から強盗が3人でてくる。

「おらっ、グズグズすんな！さっと――――「お待ちなさい！」！？」

黒いバックを持ち、この学園都市では明らかに裸に等しい格好で出てくる強盗たち。

そして、それに先回りした白井が立ちふさがる。

「風紀委員ですの。器物破損、及び強盗の現行犯で拘束します。」

右腕につけた腕章を前に突き出し、警告をする白井。

強盗たちは最初こそ呆然としていたが、やがて笑い声を上げだした。

「「「ハハハハハッハ、何だよこの餓鬼！風紀委員も人手不足か！？」」」

腹を抱えて笑う3人に、怒りの形相で近づいていく白井。

あぁ、あの3人。終わったな……。

「おら、お嬢ちゃん。とっととどっか行かねぇと、怪我しちゃうぜッ！」

そう言って掴みに掛かったのは一番体格のでかい男だ。

白井の頭に掴みかかろうとするが、

「ぬわっ！？」

「そういう三下の台詞は――――――」

白井は頭を掴みに掛かっていた腕をヒラリと避け、そのまま腕を掴む。

そのまま強盗の勢いを利用して足掛けをし、強盗は見事に空中を一回転。

「――――死亡フラグですわよ？」

「「なっ！？」」

地面に叩きつけられた強盗は白目を剥き、気絶した。

強盗は仲間を一人で瞬殺した白井に驚く。

「す、凄い。」

「さっすが黒子。」

「何度あの体術に関節技を決められたことか……。」

「「……どんまい（です）」」

驚く佐天に、感心する美琴、その傍らで膝をつく俺。

うぅ、いくらハイスペックな体とはいえ、関節は痛いんだぞ。

「だ、駄目ですって！今広場からでたら！」

「で、でもっ！」

その近くで揉めあっている初春とバスガイドさん。

原作通りだな。

「どうしたの？」

「それが――「男の子が一人足りないんですっ！少し前にバスに忘れ物したって行ったきり！」」

初春を遮るように説明するガイドさん。マジで必死のようだ。

だって、顔が泣きそうだもん。

「じゃぁ、私と初春さんとりゅう兄で――――「私も行きますっ！」
……分かった、手分けして探しましょう。」
美琴は佐天に押されて、皆で捜索を開始する。
……俺もはいってるんだな。まぁ、やるけども。

※※※※※※※※※

ｓｉｄｅ　三人称

強盗の一人は右手を突き出し、炎を発生させる。

「今更後悔しても遅せぇぞ？」
「（発火能力（パイロキネシスト）……）」
白井は強盗の能力を冷静に分析する。
こういう戦闘では、自分の能力を堂々と見せるのは負けの要因になる。
無能力者と見せかけて、近距離でぶっ放した方が、勝率が高いからだ。

「俺を本気にさせたからには、消し炭になってもらわないとなっ！」

「（ったく）」

白井は周囲の被害を気にせずに能力を使おうとした強盗を見て、心の中で愚痴をこぼし、移動を開始する。

走っていくのは、道路のど真ん中だ。

「おっおい。ちょっと――――」

「逃がすかよっ！！」

発火能力者の強盗は、白井が走りだしたのを見て、逃げていると勘違い。

走る白井に向けて、もう一人の制止を無視して炎を放つ。

放たれた炎は、白井を追跡するように弧を描き、道路で急停止した白井を襲う。しかし、

「誰が――――」

着弾の瞬間、白井は己の能力である空間移動を行使。

その場から消え去る。

「消えた！？」

強盗は驚愕し、思わず身を固める。

だが、学園都市では常識に当たるその光景に戦闘中に驚くなど論外だ。

「――――逃げますの？」

「ッ！！？？」

虚空から目の前に現れた白井に男は再び驚愕。

白井はさらにその一瞬で演算を行い、能力を行使。

男の頭上に現れ、見え見えになる、かな～り際どいパンツを気にせず、派手にドロップキックをぶちかます。

「ぐわっ！！」

蹴りを受けた発火能力の強盗は、よろめき地面に倒れ伏せる。

さらにそこに空間移動（テレポート）で現れた白井がとどめと言わんばかりに能力を行使。

ヒラリと舞ったスカートから顔を覗かせる太ももの金属矢が牙を剥く。

タンタンタンと、金属矢が強盗を地面に縫い付けるよう的確に現れるたびに音がなり、いつでも攻撃できることをアピール。

「て、空間移動能力者（テレポーター）！？」

強盗は現れた金属矢をみて焦る。

無理も無い、物体を此処まで正確に空間移動を使える人間は、目の前にいるような小娘でも脅威の存在と化すのだから。

空間移動能力者（テレポーター）は、１１次元演算を使い、物体を転移させることができる。そして、空間移動の脅威は、転移先に物体が存在した場合、問答無用で物体を押しのけて空間移動するのだ。

つまり、どんなに硬い防御でも、ちり紙に等しい防御力に変り、空間移動可能距離から脱しない限り、ほぼ回避が不可能ということだ。

「これ以上抵抗するなら、次はこれを体内に直接、空間移動（テレポート）させますわよ？」

「くっ！」

歯を食いしばる強盗だが、その目の決意は変らない。

人知れず、原作が変る予兆だった。

※※※※※※※※※※

九条龍也は焦っていた。

彼は原作の物語、つまりは佐天が蹴られるのを防ごうとしていた。

「いませんねー龍也さん。／／／／」

彼の近くには佐天がいた。

彼と佐天の顔が近すぎて、佐天の顔が赤いのには龍也は気が付いていない。

「（くそっいない！どこだ！？）ちょっと向こうの方を探してくるわ。」

「はーい。」

彼はこの近くにはいないと思い込み、その場を離れて探そうとした。

そんなときだった。

「あっ！なんだお前！丁度いい、一緒にこい！」

「え？なにおにいちゃん？だれ？」

「いいから来いって！早く！」

佐天の目にその光景が映ったのは。

彼も気が付いたが、かなり距離が離れていた。間に合いそうにない。

「（私だって……！！）」

佐天は子供をかばうように割ってはいる。

「わっ！何だてめぇ！離せよ！」

「へ？」

佐天を引き離そうと、強盗がしたのは蹴りでなく、あろうことか、ナイフを取り出し刺そうとした。

彼は慌てて空間移動をしようとするが、通常で強能力者（Ｌｅｖｅｌ　３）の彼、ましてや焦るという不の感情の状態では、大能力者相当の己の転移ができるはずもなかった。

――――だから彼は、迷わず瞬歩を使い急接近した。

一瞬にして距離を縮めた龍也は、彼にとって塵を掃うように、強盗のナイフを弾いた。

いや、粉々に破壊した。

理性の少ない龍也にはその手加減すら難しかった。

「なっ！？お前どこから　　グハッ！！？」

問答無用で腹を殴られた強盗は、逃走の車の横まで殴り飛ばされる。

鈍い音から、肋骨の2，3本折れてるだろう。

「くそっ！こうなったら！！」

強盗はそのまま車に乗り込み、全力でアクセルを踏み込んだ。

そんなことを龍也は見過ごすはずもなく、一歩前に進んだその時だった。

「くらえッ！！！」

今まで地に伏せられていた強盗が強烈な炎を放った。

全力で放った炎をみた白井は、強盗を足蹴りしている。

「龍也さん！危ない！？」

横から迫ってきた炎を見た佐天は、龍也に向かい叫ぶが、彼は見向きもしない。

その場の誰もが直撃を予想したが、それは違った。

「邪魔すんじゃねぇ。今俺は怒ってるんだ。」

背筋の凍るような低い声がその場に響いた。

彼は、右手を炎に突き出す。たったそれだけだった。

「へっ！えらそうな口きいと・・・・い・・て？」

発火能力者の強盗は、途中で声を詰まらせる。

自分が全力で放った炎を、いとも簡単に打ち消されたのだから。

右手を突き出す。彼はたったそれだけで、赤子を捻るより簡単に、その炎を無かったかの如く無に還した。

幻想殺（イマジンブレイカー）しだ。

そして彼は意識を集中し、己の能力の副産物である幻想殺しを、意図的に無くし、能力を全力で開放する。

もう一度、右手を突き出す。

「アルター能力開放」

彼の言葉と共に、右腕が変化した。

この力は、とある世界で非合法の仕事をアルター能力を使って解決する便利屋の力である。そいつは、反逆者。

ＮＯしか言わない反逆者。

ＮＯと言ったそばからＹＥＳと言う馬鹿。

五歳児並の頭脳で究極のロリコン。

アルター能力

融合装着型

「シェルブリット」

右腕が装甲に覆われ、背中に三枚の羽が生える。

彼はそれを構えて、衝撃を受ける体勢になる。

Ｕターンしてきた車は、彼が正面に立っていることを確認すると、堂々と突っ込んできた。

「お、思い出した！風紀委員には捕まったら最後、身も心も再起不能にする最悪の空間移動（テレポーター）能力者がいて――――――」

「誰のことですの？それ？」

発火能力者（パイロキネシスト）の強盗が唐突に語りだした。

白井は不満のようだ。

「さらにはその空間移動能力者（テレポーター）も見も心も虜にする最強の電撃使い（エレクトロマスター）がッ！」

「へ？私？」

額からビリビリと電気を放つ美琴は、いきなりの振りについていけていないようだ。

「真ん前から撃ち砕く！オレの自慢の！拳で！！」

本来、１枚ずつ消費して推進力を高めるはずの羽が、彼の能力による力のごり押しで、一気に三枚消費され推進剤となる。

そんなこともしらずに、車は突っ込んでくる。

「そして、その二人と恋人との目撃証言が多い、能力を問答無用で打ち消し、魔法のような力を使う最強の魔法使いの男！」

強盗の説明に続くような形で能力が行使されていく。

「抹殺のぉぉぉッ！」

龍也が足に力を込めたせいで、足元のコンクリートが粉々に砕ける。

「そう、あの方こそが、学園都市で今最も話題とされている、最強のＬｅｖｅｌ　１――――――」

なにを想像しているのか、ニヤニヤしている白井。

「ファストブリットォォォォォッ！！！！！」

今度こそ足元はクレーターと化し、龍也の拳は超高速の拳となり、強盗の乗っていた車は完璧に粉砕された。

龍也のわずかに残った理性が、彼の周りに防御を展開しなければ、彼はグチョグチョにつぶれていただろう。

今は失禁起して気絶している。

「――――――魔法使（ウィザード）いこと、九条龍也お兄様。常盤台の身体測定のことで掲示板がたっている最強のＬｅｖｅｌ　１ですの。」

目の前にある、真ん中から粉々になっている車が、先ほどの威力を証明しており、その戦闘の衝撃波は、あたりに強烈な風として現れたことから、凄まじい攻撃だと分かる。

※※※※※※※※※※

警備員が到着したころには全て終わっていた。
事情徴収が終わったのは日暮れのころだ。
「一般の方の負傷者はゼロです。それと――――」
警備員は、龍也の作ったクレーターも写真に収めている。
これも、学園都市の科学力であっというまに修復されるだろう。
「さ、さっと歩いてください。」
そう言ってせかすのは、眼鏡の女性、鉄装綴里。
強気なのか、ビビッて敬語なのか、よく分からなさすぎる発言だ。
「あなたの能力もなかなかのものでしたわよ？」
白井は、連行されていく発火能力者の強盗に話しかける。
「強能力者（Ｌｅｖｅｌ　３）といったところかしら、能力に有頂天になるあまり、道を違えたようですわね。」
あたりにシリアスな雰囲気が漂う。白井が真面目だ。

「しばらく自分を見つめ直して、もう一度出直してくださいな。」
強盗は何かを考えるように俯き、連行されていった。

※※※※※※※※※※

ｓｉｄｅ　龍也

おぉ！名場面が今、目の前に！

白井カッコイイぜ！

「本当に、ありがとうございました！」

そして今は、佐天が御礼を言われている。

母親に頭を下げられて、困惑していて、固まっている。

「い、いえ・・・あの・・・・」

「なんと御礼を言っていいか・・・ほら、あなたも。」

「お姉ちゃんありがとう。」

その様子に佐天は照れている模様。

萌えだ！これが萌えなんだ！

「お手柄だったね、佐天さん。凄くカッコ良かったよ。」

「おう、アレは感動したな。」

取り合えず、俺も便乗しておくことにした。

「龍也さんも「お姉さま～！」

やってきたのはシリアスブレーカーの白井だ。

ミコトの背中に抱きついている。

佐天はそれに唖然。

「佐天さん、お怪我、大丈夫ですか？」

その後にやってきたのは初春だ。

どうやら固法さんに報告済みの様子。

「へーき！へーき！龍也さんが守ってくれたし／／／」

若干頬を染める佐天。

あれ？嫌な予感が・・・・

「「りゅう兄（お兄様）？」」

背後から黒いオーラを発している二人がやってきた。

フラグ立てたつもりなかったんだけどなー・・・・

「あれ？そういえば、白井さんって、龍也さんと御坂さんのどっちが好きなんですか？二股ですか？」

ナイス！初春ナイス！

質問があれだけど、取り合えずナイス！

「違いますわ！二股とは二人以上の恋人がいること、しかし私は両方とも恋人ではありませんの。よって二股ではありませんわ！」

「屁理屈だな」

「屁理屈ね」

「屁理屈ですね」

「えっと、皆さんひどすぎじゃ？」

何を言う佐天。こういう奴には一度ガツンと言わないといけないの

だ。

「「日頃の恨みを晴らすんだ（のよ）」」

・・・これが本音じゃないよ？この間の関節技での連行を恨んでるわけじゃないよ？ホントダヨ？

「お兄様にお姉様！酷すぎですの！？」

あー、あー、聞こえない。

今日も平和だ。

「ちょ、ちょっと無視ですの！？だから私の話を――――」

「うるさい！」

バチバチバチィィィィ

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・平和ったら、平和なんです。

とある科学の超電磁砲　後編！（後書き）

はい、第４話でした！

正直書いてる当初はどうなるかと思いましたね。

ネタがないんです。

前書きにあった通り、主人公がシャシャってましたね。はい。

物語も飛び飛びだったし・・・・・

いや、書いてもよかったんですよ？

ただ、本当に中編が必要になるみたいでｗｗｗｗ

とばしました。ごめんなさい。

今回の技は、ＢＬＥＡＣＨより瞬歩とスクライドよりアルター能力です。

瞬歩は異能じゃないかも知れませんが、超人的な身体能力で行使したと思ってください。

アルター能力は融合装備型でしたが、あくまで能力による一時的なもので、カズマみたく常に発動みたいになりません。

その際障害となる幻想殺しには退場してもらいました。副産物設定ですから、意図的に操作できるということです。

普段はスキマによる境界を作ることで、異能の力を宿した武器を持つことができていると解釈してください。

ＰＳ、スクライドヒロインの由詑かなみとリリなののなのはの声が同じだったことに非常に感動した。

リリなのの夢での始まりで二重の感動しました。

アレイスター・・・そいつは引きこもり。（前書き）

今回の内容は・・・・・題名で分かりますね？

今回、アレイスター登場です。

・・・エイワスも出てくるんですが・・・皆さんわかりますか？

特にアニメの人。

本当、すんません。

今回は戦闘なしです

それでは、第５話どうぞ。

アレイスター……そいつは引きこもり。

「ジリリリリリリリリリｒッ！」

朝一に目覚ましが鳴り響き、俺はその音で目が覚めた。

眠りを誘惑してくる布団を払い、ベットから起き上がり背伸びをする。

時刻は朝方、朝方といっても、まだ太陽も全然昇っていない時間帯だ。

やっとの思いで覚醒した意識を動かしながら、いつも通り体調を確認していく。

体調の確認といっても、やってることは体調確認ではない。能力が正常に働くかどうかだ。

超電磁砲のときのように、普段からフルバーストの勢いで能力を展開するわけにもいかず、普段の不良（スキルアウト）の連中にはこの世界の超能力で対応しているからだ。

強能力者（Ｌｅｖｅｌ　３）程度の能力でも、複数組み合わせれば、大能力者（Ｌｅｖｅｌ　４）ぐらいは倒すことができるからだ。

何故未だに自分が低能力者（Ｌｅｖｅｌ　１）なのか理解できない。

今日も愉快な学校があるのだが、そのために早く起きたわけではない。

今日は行く先があるのだ。今後のために行動は早いほうがいい。

「さて、行きますか……」

目の前にスキマを開くと、その中に入っていく。

行く先は、窓なしのビルだ。

アレイスターに会いに。

※※※※※※※※

Ｓｉｄｅ　三人称

ここは窓のないビルの中。

学園都市の最高権力者にして、世界最高の科学者がいる場所だ。

ビルの中には円柱の水槽のような、生命維持槽が存在している。

その中で微笑んでいるのは、男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える『人間』。

生命維持槽のビーカーには弱アルカリ性培養液が満たされ、緑の手術衣のまま、その中に逆さまになって浮かんでいる。

ソイツの名はアレイスター＝クロウリー

推定寿命は約１７００歳と、現代に生きる化け物だ。

世界最大の魔術師と同名を名乗るが、　かつての大魔術師とは特徴などが科学的・魔術的に一致しない為、　関わりを持つ人間のほとんどには「同姓同名の別人、もしくは偽名」と思われている。

が、その正体は、生命維持装置に生命活動を任せることで、魔力生成に必要な生命力を機械的に生み出し、あらゆる探査をかい潜ってきた、クロウリー本人だ。

「ふむ・・・」

そんな彼は目の前の報告書を読みふけっている。

報告書、といっても、ディスプレイで表示されており、軽い一動作で表示の変るハイテク仕様だ。

報告書には、昨日の事件について書かれている。
銀行強盗だ。

「九条龍也か……」

報告書に書かれている名前を読み上げるアレイスター。
九条龍也に関する書類が上がってきたのは、何も今回が初めてではない。

彼の能力とされる『幻想操作（イマジンオペレーション）』は、アレイスターの練る計画に、殆どの確立で影響されるのだ。

しかし、アレイスターの疑問はそこではない。
上がってきている報告書の内容と、自分で得た情報が一致しないのだ。

アレイスターは基本的に此処に籠っている。では、どうやって自分で情報を得たのか。
答えは簡単だ。この学園都市では、滞空回線（アンダーライン）と呼ばれる、アレイスターの直通情報網を形成する中核となる、学園都市中にばら撒かれた５０００万機ほど散布されている７０ナノメートルのシリコン塊があるからだ。。

形状は球体状のボディの側面から針金状の繊毛が左右に二対・六本飛び出しているもので、空気中を漂うような感覚で移動を行う。

機体自体が空気の対流を受けて自家発電を行うため、半永久的に情報収集が可能であり、収集したデータは、体内で生産した量子信号を直進型電子ビームを使って各個体間でやりとりされ、一種のネットワークを形成している。

アレイスターはそれを使い、情報を得た。

しかし、自分が滞空回線を通して見た映像とは、報告はまるで違った。

どうしても違和感のぬぐえない、まるでぼかされているような、そんな映像だった。

そんな、非科学的な現象を起せる手段を、アレイスターは知っている。

「魔術‥‥か。」

再び目を落とすアレイスター。

実際、彼の報告書では、それらしき情報が何度か確認されている。

そのために、彼の今回の身体測定では、世界を創造するのに必要な力を、科学的、魔術的に徹底的に追求した基準に設定してみた。

するとどうだろうか。

低能力者（Ｌｅｖｅｌ　１）

数値だけ見ればたいしたことないのかもしれない。

しかし、実際はそんな数値を人間が出してはいけない。いや、出すことができないのだ。

結果は、低能力者だが、その力は世界の創造が可能

この結果が無ければ、計画に利用しようとしたかもしれない。だが、明らかに人の手におさまる器ではないのだ。

過去に一度、彼の親友に手を出したことがある。

彼がまだ研究所にたらい回しにされていたころだった。

彼の能力に興味をもったアレイスターは、間接的情報操作で、彼の能力を引き出そうと、親友を人質に交渉をしてみた。

結果、研究所は消滅、学園都市の戦力をかなり削られ、滞空回線もその戦闘余波で１週間機能停止した。

今思えば、学園都市が消えなかったのは奇跡だろう。

と、そのとき、アレイスターの捕捉していた彼の反応が唐突に消えた。

アレイスターの表情が少し厳しくなるが、すぐにいつもの胡散臭い微笑みに元通り。

彼の反応が消失するときは、必ず彼が行動を起すのだ。

次はどこに現れるかと、滞空回線に指示をとばすが、反応が無い。

おかしい、いつもはどこかに反応がでていた、ならばどこに？

アレイスターは再び思考するが、答えはすぐに出た。

学園都市にて、唯一ナノマシンの存在しない場所。

「でてきたらどうだい？」

アレイスターが虚空に話しかけた瞬間

パックリと、空間が裂けた。覗けば中は目がたくさんある禍々しい

空間だ。

見たことない力だ。と、アレイスターはそう思った。

「見たことない力、か‥‥。どうやら認識妨害はちゃんと効いていたみたいだな。」

スキマから現れた黒髪をポニーテールのようにしている少年は、着地と同時にそう言った。

心を読む、という力を何の予備動作もなく使ったのは、かなりの脅威だ。

実際、彼は超能力は普段、強能力者程度と、報告がきている。

強能力者では、集中もなしに能力の行使はできない。しかし、彼はそれを平然と行った。つまり、この世界の力ではない、ということだ。

心理掌握（メンタルアウト）より酷い能力かと、アレイスターは身をこわばらせ無心になるが、実際はそうでもなかった。

「無心になってもいいが、お前が考えるような能力ではないぞ、アレイスター。ただの、心を読む程度の能力だ。‥‥まぁ、信じるわけないいか。」

「その通りだ。君ほどの能力者が、それくらいしかできないとは、考えられないからな。」

お互い警戒心バリバリの体勢だった。

「まぁ、いいや。手短に用件を済ませよう。」

「なんだね？」

「身体測定、アレはお前だろう？」

龍也はそう言って、足元に散乱するケーブルを忌々しそうにはらう。何故斬らないのかというと、斬ったところで何の意味もないからだ。つまりはただの飾りだ。

「あぁ、君の能力がどの程度のものか気になってな。世界創造に必要な力を基準に測らせてもらったよ。」

「……結果は？」

「可能だ。もっとも、君の能力は想像力がものをいうみたいだからな。実際に世界を創造はできないだろうな。」

アレイスターは憶測を言う。嘘を言ったところで、全て見抜かれるからだ。

なにやら驚愕している龍也にアレイスターは現実を突きつけるように、統計した書類を突き出す。

「凄いな・・・世界法則はどこにいったのやら。魔術で説明できないぞ？」

龍也の魔術の言葉に、アレイスターはやはり・・・と思う。

あきらかに非科学的な力を使ってたらな・・・・・

アレイスター「君は科学側だと思ったが？」

「おいおい。アレが科学と思うか？元をたどれば、科学より魔術に近い力だろうしな。」

まぁ、どっちでもないけど。と、その後に龍也は続けた。

「君は何者なんだい？何でも知っているかと思えば、常識を知らなかったりする。さらに明らかに他世界の力を、まるで知っているかの如く扱う。」

「・・・・・誰にでも公にできない秘密ってもんが、１つはあるんだぜ？あんたにだってあるだろう、アレイスター。例えば・・・・・・『ドラゴン』とかな」

さっきまでの雰囲気がガラリと変り、再び探りあいが始まる。

ピリピリとした感じが伝わってきそうな空気で、お互いが睨みあう。

「…どこで知ったんだい？」

「何言ってんだか、あんなもん昼間から堂々と、そこらへんに放っておいたら嫌でも目につくな。」

「いい加減あきれるな。できれば計画の邪魔をしないでほしいんだが。」

「保障はできないな。被害を受ければ反撃するし、気に入らなければ即刻排除だ。…っと、そろそろ時間だ。」

龍也はそう言って、腕時計を確認したあと、自らの横にスキマを開く。

移動先は自宅だ。

「…一応聞いておくが、暗部に入る気は？」

その瞬間、龍也の目が鋭くなった。普段では考えられないほど、冷徹な目だ。

「人様の親友に手を出しといて、今頃自分の駒になれだって？ふざけてんのか？」

低い声が、ビルの部屋に響いた。

とんでもない殺気を放つ龍也に、アレイスターは背筋を凍らせる。
いつものような優しさは微塵も感じなかった。

莫大な『天使の力(テレズマ)』が彼に収束しているのが、意識せずにもアレイスターは分かった。
それほど凄かった。

「過去は割り切って復讐なんかしないつもりだが、それとこれは話が別だ。」
龍也は捨て台詞のようにそう言って、スキマの奥に消えていった。
アレイスターは難しい顔をしている。

「あれが、貴様の言っていたやつか？アレイスター？随分とこちらの情報が筒抜けだな。」
「・・・エイワスか」
入れ違いで現れたのは、金髪の光り輝くような長身の持ち主。
ゆったりとした白い装束を身にまとっている。

「あれの力、どう見る？」

「分からん。ただ、科学でも魔術でもない、といった所か。あの少年からはｆｒｉｊｋｗｅｒｙを感じた。ちっ、やぱり言語が追いつかないか、まぁ、私は興味を持った、いつか姿を現すとしよう。」

エイワスの言葉になにやらノイズが走り、思うように言葉にできていない。

アレイスターは今も難しい顔をしている。

「・・・会うのはいいが、消されるなよ？」

「簡単にやられるほど、私は柔ではない。逃げることなど造作でもないな。」

「ところで、『彼女』の方はどうだった？」

アレイスターの言葉に眉を寄せて、顔を顰めるエイワス。

アレイスターは何時の間にか胡散臭い笑みだ。

「私に聞くのか？私は貴様の僕でも何でもないのだが。」

「見てきているのだろう？意見を聞きたい。」

エイワスは溜息を吐き、話し出した。

「少なくとも、実験通りは無理だろうな。反動でダメージを負うようじゃな。体内にｉｒｊｓｒｆｄｆｌｙちっ、体内に特殊な何かを展開させて、行っているようだ。十中八九魔術だろうな。」

再びノイズが走り舌打ちするエイワス。

アレイスターはそれを聞いた後、意見をいうこともなく、残念がることもなかった。

「そうか・・・それなら、計画通り決行だな。」

「・・・あの少年に何されるか分からんぞ？」

「その時はその時だ。」

エイワスはそうか・・・と、言い残し、消えていった。

あたかも、最初から存在しなかったかのように。

「さて、女神はどちらに微笑むか・・・」

アレイスターが呟くと、再びビルに沈黙が訪れた。

アレイスター・・・・そいつは引きこもり。（後書き）

はい、第5話でした。

今回は若干シリアスめにしてみました。

何か凄い伏線を引きすぎた・・・・

主人公・・・・世界創造・・・・チートにしすぎた結果がこれだよ！

まぁ、見逃してください。

アレイスターとエイワス、口調が分かりませんね・・・・・・あと、ローラ。

取り合えず、主人公の過去フラグについては、近いうち回収したいと思います。

ちなみに親友ってのは男です。大切な人だと、女に思われそうですからね。

『彼女』と実験については、まだ秘密です。

こちらもキチンとフラグは回収しますね。

魔術については・・・型月です。これだけで分かる人いたらマジ凄いです。

虚空爆破事件は次の次です。

次回は、題名に予定の通り、どうでもいいような1日です。戦闘は美琴と少々。

明日投稿です。０：００時です。

どれでは、また明日っ！矛盾報告も宜しくお願いしますっ！

どーでもいいような一日（前書き）

第６話です。

今回は、題名通りどうでもいい話です。

え？なら虚空爆破始めろって？

さーせんｗｗｗ休憩ですｗｗｗ

まぁ、次は虚空爆破開始です。できるだけ一話に収めますが、できなかったら前後に分けます。

それではどーぞ。

どーでもいいような一日

7月17日。午前中はもう終わり、現在は午後。

昼休みの昼食の時間も終わり、現在は授業再開中だ。

この時間帯は睡魔が容赦なく襲い掛かってくる睡眠ラッシュの時間帯なのだが、今は誰も寝ていない。

黒板には大きく自習の文字が書かれており、教卓にはプリントが置かれている。

しかし、自習といえば皆サボるものなのだが、先も記述した通り、不真面目な生徒も寝ていないのだ。

眠そうな顔をしているが、誰も寝ることはない。

なにやら強敵と戦うような顔をしているが。

かくいう俺も、眠いが絶対に寝ない。

何故なのかは、教卓の前に座っている教師が理由だ。

永遠の幼女先生、月詠　小萌先生だ。

彼女は、自分の授業中だと、たとえそれが自習の監督だったとしても、生徒が真面目に授業をしていないと、泣きそうな顔をする。

そうなると、このクラスの人間はその犯人を、何やってんだよお前、殺されたいのか？的な目でせめるのだ。

つまり、寝れば殺される。

孔明の罠かっ！

「う、うがーーー！数学とか分かりませんよーッ！あれですか？新手の外国語ですか！？」

俺の隣では、問題がまったく分からずツンツン頭をガシガシしている人が一人。

とりあえず、それは違うよ当麻、うん。

「ちゃうね！そこはやっぱりロリやろ！」

「それは違うにゃー、妹の方が分かりやすいぜぃ。」

さらにその近くでは青髪ピアスと土御門がなにやら熱く語っている。

・・・最初は勉強の話だったのだが、どうすればそうなるのだろうか。

俺はそんなことを考えつつも、ひたすらペンを走らせていく。

『答えを出す者（アンサートーカー）』は学生の味方だねっ！

「キーンコーンカーンコーン」

数枚に及ぶ数々の自習プリントをやり終えて、ペンを置くと同時にチャイムが鳴った。

「今日の学校はここまでですー。皆さん、怪我のないように帰ってくださいねー？」

小萌先生の言葉を聞くと、皆ペンを置き、片付けていく。

「おーい、当麻。帰ろうぜー。」

「あっ、悪りぃー。待たせたな。」

帰る際に当麻に声をかけて一緒に帰る。

因みに当麻と青ピと土御門は、小萌先生の自習課題は宿題ですー、という言葉にうなだれていた。

※※※※※※※※※※

俺は常々自分の能力に疑問を思っている。

この世界にきた頃から、自身の能力は超能力だと思っている。

だが、超能力の強弱（レベル）は演算能力で影響しているのではなかっただろうか？

それならば、俺はこの世界の超能力を高レベル状態で使える筈だ。

しかし、研究結果では感情に強さが左右するらしい。

ならば、俺の能力は演算ではなく感情が基準なのだろうか、と考えたが、それも違う。

能力で異世界の力は通常通り行使できるからだ。

何故なのだろう……

「あの？龍也様？聞いていますでしょうか？」

帰宅をしている途中で考えごとをしていると、当麻から話しかけられた。

台詞からするに、俺は話を聞き流していたようだ。

・・・そんなに考えていたか？

「悪い、聞いてなかった。・・・で、なに？」

「是非とも私上条当麻の宿題を手伝ってくださいっ！」

土下座しそうな勢いで頼まれた。

今日は超電磁砲は確か・・・・・午前中の偽風紀委員騒動以外になかったな。じゃぁ、いいか。

え？原作介入しなかったのかって？そりゃぁ、お前、学校だったから。無理に決まってんだろ。

「別にいいぞ、暇だったしな。」

「ありがとうございます！私上条めは感動です！」

そこまで感謝されても・・・

・・・野郎にされても嬉しくないぞ？

※※※※※※※※※

場所は変わって寮の自室。

学校に持っていった鞄は自室に整理して置いていく。
因みに自室は俺のコレクションの一角となっている。
まぁ、誰も入れないが。

適当に荷物をまとめてスキマに放り込み、財布を持っていく。
行く先は隣の部屋だ。

「おーい？当麻？来たぞー？」

俺が声をかけると、扉がすぐに開いて中から当麻がでてくる。
着ているのはまだ制服のようだ。

「あ、すまん。今日食べるもんがなくてさ、買おうと思ったら金がなかったから、下ろしてきていいか？」

出てくるなり第一声がそれだった。
勉強を教えろといったそばからそれか。

あれ？そういえばそんなイベントがあったような・・・？

「まぁ、いいぞ。暇だし着いて行く。門限はこの寮なら関係ないだろうし、勉強は夜でもできるだろ。」

「おー！何から何までサンキューな！」

当麻はそう言って一度部屋に戻り、荷物をまとめて戻ってきた。

さて、出発だ。

side out

とある学区の歩道をズカズカと歩いている少女がいた。

彼女の名前は御坂美琴、額から軽く放電をしており、周りから注目されている。

彼女、美琴は朝からこの調子で不機嫌だ。

「もうっ！朝から何なのよっ！風紀委員と誤解されちゃうし！勘違いして濡れ濡れのグチャグチャになっちゃうしっ！りゅう兄は朝から連絡とれないしっ！……もう！なんなのよ！」

額からだけでなく、体からも放電する。

その放電に周りの人はさっとガード体勢に入った。

「このイライラをどこへ向ければいいのやらっ！」

とりあえず、他人に向けるのは間違っていると思う。

気にせず歩いていると、美琴の耳に聞きなれた声が聞こえてきた。

「ちょっとーーー！？ＡＴＭにカード呑まれたんですけどーーッ！？」

「……相変らず、不幸全開だな。」

その声にピクリと反応した美琴は、バッとそちらを振り返る。

そこにいたのは、自分がりゅう兄と慕う人物と、摩訶不思議能力で自分の能力を防ぐ少年がいた。

「あ、あいつ～ッ！人様の連絡に出ないで何をしているかと思えば……」

バチバチバチバチッ！

と、本格的に放電を始めた美琴を見た周囲の人は、いち早く退避をしている。

「人の電話くらい出なさいよッ！！！」

体中から放電していた電気が、美琴の額の前に集中し、雷槍と化す。

とんでもない速度で放たれた雷槍は、唸りながら正確に2人へ向かっていく。

音に気付いた2人は振り返り、事態を確認すると何かする前に反射的に避けた。

すると、ＡＴＭに雷槍は当たるわけで、プシュー・・・と、音をたてて機能を停止させる。

しかし、それと同時に詰まっていたと思われるカードが出てきた。

「お、おぉぉ！！何かしんねーけど、ビリビリに感謝だ！」

「・・・ビリビリ？あぁ、美琴のことか。」

ＡＴＭに呑まれたカードが出てきて狂喜乱舞する当麻。

それを見た美琴の怒りのボルテージは上がるわけで・・・

「あ、あんたねぇ・・・！私は便利屋か何かかっ！」

再び雷が迸るも、当麻の右手に打ち消される。

「あんたといい、りゅう兄といい！何で私の能力が効かないわけ！？」

「りゅう兄・・・だと？ま、まさか！龍也も遂に土御門に侵されてしまったのかッ！？」

「違うわ！幼馴染みだよ！幼馴染み！あんなシスコンと一緒にすんな！」

苛立つ美琴を完全に放置して、会話する2人。

そしてそれで、さらに苛立つ美琴。

再度さらに雷撃を放ったが、今度は龍也の右手に打ち消された。

「今・・・のは、幻想殺し？龍也も幻想殺しが使えるのか！？」

「いんや、幻想殺しだけど、俺の能力は幻想殺しじゃないぞ。」

再び美琴を無視して、置いてけぼりの会話を始める2人。

美琴は今度こそ当てると、大規模な雷撃を起そうとし、最終警告をしようとする。

「あんた達！これが最後の――――」

「・・・ストーップ！早く逃げるぞ！」

「へ？」

自分の台詞を遮られ、大声を上げた龍也の方をみて、美琴は間抜けな声をあげてしまう。

我に返り、反論しようとするが、龍也がとある方向を指差していたので反射的に向いてしまった。

指先には、プスプスと煙を上げるＡＴＭ。

間違いなく警備員に報告がいっていた。きっと強盗と間違えられるに違いない。

「つー訳で逃げるぞ！当麻はもう逃げやがった！」

「え？きゃ、きゃーーーッ！？」

美琴は龍也に手を握られて、もの凄い速さで移動を開始した。

美琴は顔が真っ赤だが、龍也はこれっぽっちも気にしていない。

あれ？最近似たようなことがあったような・・・？と、美琴はデジャブを感じながら、引きずられていった。

※※※※※※※※※※

「ふー、ここまで来れば大丈夫か・・・・」

「はぁ、はぁ・・・・りゅ、りゅう兄速すぎよ・・・・！」

2人が逃げ切ってきたのは河川敷。

原作でも出てきた河川敷だ。あの、人気のない河川敷。

「おう、悪い悪い。」

「は、反省してないでしょう！？」

余裕しゃきしゃきの龍也に対し、美琴はもうバテバテだ。

因みに美琴の服が乱れていて、それを直視しないようにそっぽを向いている。

前世と年齢を合わせればいい年こいたおっさんが、中学生の乱れた服に赤くなるのはどうかと思うが。

「それより、りゅう兄！何で電話に出ないわけ！？ずっと連絡してたのに！」

乱れた服を直しながら、美琴は憤慨したように龍也を問いただす。

それに対して龍也は、は？といった表情をしているが。

「何言ってんだ、ミコト？俺今日昼過ぎ以降も学校だから連絡できないと、メールした筈だが。」

「……へ？」

どうやら美琴は忘れていたようだ。

なにやら頭に手をあてて、考えていたが、どうやら思い出したようで、だんだんと顔を赤くしていく。

「まさか…忘れてたとか？」

「ち、ちちち違うわよ／／／！しょ／／勝負よ／／／！今日こそどっちが上か証明してあげるんだから！／／」

「ちょッ！？危なっ！！？」

美琴は問答無用と言わんばかりに雷撃をバンバンと放つ。

それを龍也は持ち前の身体能力を活かして、右手を避雷針のように利用し、とんできた雷撃を打ち消す。

いくらツンデレでも、一般人なら死んでいるだろう。

止まる様子のない美琴に龍也は溜息を吐き、構えをとる。

「やっと、やる気になったわねっ！」

美琴から放たれる電撃の嵐が止む。

美琴は代わりに手のひらを地面に向けるように、手を突き出して、そこから電撃を放ち、電磁力を応用して砂鉄の剣を作り出す。

作り出された砂鉄の剣は震動で切れ味を上げて、唸りを上げる。

「ていっ！せやっ！」

美琴の掛け声と共に、砂鉄剣は中をうねりながら、見事な曲線を描き、龍也に襲い掛かる。

が、またもや右手に防がれて、砂鉄の剣は空中分解をする。

「まだまだっ！」

もう片方の手から、もう一本砂鉄の剣を作り出し、鞭のように振るう。

「だから無駄だ！」

再び右手で砂鉄に戻されて空中分解した。

それを見た美琴は次の手を打つ。

美琴は一旦足を止めて、電磁力の操作域を広げ、空中に漂う砂鉄を、龍也を中心に針のようにして出現させる。

電磁力を持った砂鉄の針は、お互い引き合うように、磁石の性質を持って、中心にいる龍也に襲い掛かる。

「ちょッ！？殺す気か！？」

龍也は慌ててしゃがみ、攻撃を回避する。

「ドガガガガガッッ！！」

つい先ほどまで龍也の胴体があった場所に、砂鉄の針が殺到する。

龍也は安堵したが、それもつかの間、さらに美琴は砂鉄を操り、龍也の頭上にある砂鉄を変化させ、檻みたいに龍也を囲むように攻撃する。

その攻撃を先読みした龍也は、ギリギリで攻撃を回避したが、しゃがんでいた体勢が悪かったのか、檻に囲まれてしまった。

「とどめだぁっ！！」

美琴の言葉と共に、黒ずんだ空から特大の雷が落ちる。

落ちてきた雷は、砂鉄の檻の上にあるアンテナのように作られた針に落ち、檻の中に雷撃が駆け巡る。

その凄まじい衝撃に土煙が舞い、視界が狭まる。

「か、勝った？勝ったの！？」

兄のように慕う男に雷を放っておいて、その言葉は駄目だと思う。

美琴は流石に倒したと思い、土煙の無くなった場所を見ると――――

「い、いない！？」

そこにあったのは砕けて粉々になった小石の破片だった。

「はい、俺の勝ち。」

「きゃぁッ！？」

美琴は龍也にいきなり後ろから肩を叩かれて、ビックリして尻餅をついた。

それを見た龍也は、大丈夫か？、と言いながら、手を貸し起き上がらせる。

「ちょ、ちょっと！アレからどうやって抜けたわけ！？自分の空間移動は出来ないって聞いたわよ！？」

「ん？いや、アレは変わり身だ。ミコトの後ろにあった石と、俺の場所を入れ替えた。」

龍也が行使したのは変わり身の術だ。

文字通り小石を変わり身にしただけだ。

「りゅう兄の能力は、いつ聞いてもでたらめなのか、しょぼいのか分からないわよ。」

「ほっとけ・・・ほら、帰るぞ。」

龍也はそう言って背を向けて、さっさと歩き出した。

離れていく龍也に美琴は慌てて動き出す。

「ま、待ってよりゅう兄！」

慌てて着いて行く美琴の姿はほほえましいものだった。

※※※※※※※※※※※※

「神様！大変なことになってるじゃないですか！」

神「いやぁ、正直こんなことになるとは思ってなかった……」「反省してください！」

「あべしッ！？」

神と呼べれた奴は、なにやら翼の生えている天使のような存在に殴られていた。

ここは真っ白な空間。

と言っても、その部屋にはたくさんのものが集結しているが。

「だいたい、神様がどの世界の人物で、どのような人か確認せず転生させたからこうなったんですよ！？分かってますか！？」

「正直、間接的に能力の測定をしたとき、あんなに強い能力になるとは思っていなかった。反省はしている、だが後悔はしていない！」

「してくださいっ！」

「ぐはッ！？」

今度は頭を刺されるが、血は噴出さない。シュールだ。

「だいたい、能力に制限を掛けたって言いましたけど、あれ全然か

かってませんよね！？車粉々になってましたよ！？雷も受け止めれるみたいだし！」

「だから、あんな風になるとは思わなかったんだってば！前世があんまり感情的な子じゃなかったみたいだったから、感情で制限をかければ大丈夫だと思ったんだよ！」

グサ、グサッ

「肉体に憑依転生すると性格が変る制度作ったの神様ですよね！？それに、他世界の力、思いっきり普通に使えてますよ！？どういうことですか！？」

漫才のようにしているが、本人達は真面目のようだ。

ナイフが刺さったままなのが可笑しいが。

「それもミスだよ、能力与えたあとにすぐ気づいて干渉して制限を掛けたのはよかったんだけど、別世界のオが付く子だとは思わなくて・・・、その世界の力だけを制限しちゃった！」

グサグサグサグサッ

「アホですね！？アホなんですね！？幻想殺しとやらのせいで、こちらから干渉できないじゃないですか！？やっぱりアホなんですね！！！」

ドゴッ

天使らしき存在の蹴りが繰り出され、神様とやらは棚に突っ込んだ。
するとその衝撃で棚は倒れて、フィギュアやら色々が、棚から崩れ落ちる。

「あーーーッ！俺のコレクションがッ！？」

指をパチンと鳴らすと、全ては元通りに戻る。

「そもそも、神様がオタクだから今回みたいなバグが起きたんですよ！？うっかりでなんてことしてるんですか！」

「だから、修正役として龍也って奴を送ったんじゃないか。」

「その修正役もミスでとんでもない強さにしちゃいましたけどね！身体能力補正なんて必要ないじゃないですか！」

「いや、必要だッ！そうしないと、前回みたいにスクライドの技がバンバン放てないじゃないかッ！反動のせいでッ！あれは感動した！！」

「反省しろぉぉぉぉ！」

「まぁ、落ち着け、修正役が力があるのはいいことじゃないか。」

「だから、人の枠を超えてます！度が過ぎてるんです！」

「それじゃぁ――――――――」

どーでもいいような一日（後書き）

はい、第６話でした！

本当にどうでもいい１日でしたね！

フラグ回収終わってないのにフラグを立ててしまった・・・・

まぁ、あれは一応この世界に来た原因です。

かｗみｗさｗまｗなにやってんのｗｗｗｗ

自分で書いておいてなんですが。

今回は美琴との戦闘でしたね。

空中に漂う砂鉄の操作は、超電磁砲でもやっていたので、とりあえずやってみました。

あとは、ＮＡＲＵＴＯの忍術より、変わり身の術です。

確か、変わり身の術は、原作では近くにあるものと入れ替わるとのことだったので、今回は石と入れ替わってみました。

カカシも影分身のナルトと入れ替わっていたみたいですし。

次は、虚空爆破ですね。

上条さんどうしよう・・・？

まぁ、多分出すと思いますが。

爆破を防ぐのは、勿論主人公ですが。

美琴は一応、素直になれない妹的キャラなのですが、作者のイメージにより、口調がどうしても固まらない・・・どうしよう？

今更だけど、暗部蹴ってよかったのか？あそこまできて暗部を蹴るって・・・まぁ、フラグを立てる上、必要でしたが。

なんか・・・・・ねぇ？

まぁ、主人公は誰にも指図されないような最強キャラにしたかったら、そうなったんですが。

やっぱり俺が悪いのかっ！

また次回の更新で！

2／2　セリフの前の名前を消去。

他に書いていた小説のクセがうつってしまっていた；；気づくの遅れましたすみません。

指摘された誤字を修正。報告ありがとうございます。

ぶっちゃけ、誤字多すぎますね。気づきませんでした；；

とある科学の虚空爆破（前書き）

第7話です。

今回は虚空爆破事件編です。

…かなり長くなってしまいましたが、意地でも1話に収めましたwww

まぁ、あんまり原作と変わんないですね。

特にこれといった戦闘シーンもないし、描写が手抜きだろうし。

それではどうぞ。

とある科学の虚空爆破

ドスッ、ドスッ！

とある学区の路地裏で、人が人を殴るような低い音が、連続して響く。

「グッ、グァ！」

殴られている少年は、眼鏡を掛けており、耳にヘッドフォンをつけている。

「おら、オラッ！」

痛がる少年を見ても不良は手を止めず、殴る、蹴るの暴行を繰り返し、少年がダウンするのを待つ。

暫らく殴ると、満足したのか暴行を止め、倒れている少年を見下す。

暴行を繰り返していた不良は、おもむろに少年のポケットに手を入れて、中から財布を取り出した。

「チッ！これっぽっちか・・・・」

中に入ってたのは１０００円札が３枚。
それを取り出し、不良は自分の懐に入れた。

「お前ら、いくぞ！」

不良は連れ添っていた仲間と共に、路地裏を去っていく。
残された少年は、歯を食いしばって地を這っている。

「だ、大丈夫ですか！？」

そこに、通報を受けたであろう風紀委員の少女が、少年のところに駆け寄り、手を差し伸べる。
が、少年はその手を取らず、キッと、睨み付けると、己の足で立ち上がり、その場を去ろうとする。

「あの、ち、治療をしないと！？」

慌てて引きとめようと、風紀委員の少女が声をかける。
その声に少年は、立ち止まり、こう言った。

「必要ない。」

その目に憎悪を宿して。

※※※※※※※※※※

7月18日

少年は大通りを歩いていた。

別に、どこか行く宛てがあるわけではない。

ただフラフラと、音楽を聞きながら歩いていた。

ふと、目の端に、少年が探しているものを見つけた。

少女の集団だった。目で追いこそしたが、気があるわけではない。

少女の集団の内、花を頭につけている子の、腕にある腕章を追っていたのだ。

「（風紀委員（ジャッジメント）！お前らが、無能なせいで……！）」

無意識に手に持つカエルに力がこもる。

武器はある、手段もある、力もある。

「（…やってやる！僕が僕を救う！）」

目的地を決めた少年は、通りを跨ぎ、目的地に入って行く。

「Ｓｅｖｅｎｔｈ　ｍｉｓｔ」へと。

※※※※※※※※※※※

少々時は遡る。

虚空爆破（グラビトン）事件。

発端は数日前で、ここ最近、ぬいぐるみなどが相次いで爆発し、怪我人がでる事件が発生していた。

重力子（グラビトン）を加速させ、周囲にばら撒き、その基点となっている、アルミを爆発させる能力を使っての事件だ。

「はぁー、まったく分かりませんの。」

ここ、風紀委員活動第一七七支部で、白井黒子は頭を抱えていた。

そのせいか、目印のピンクリボンをしているツインテールも萎えているように見える。

「まぁー、まぁー白井さん。お茶どうぞ。」

そう言ってお盆を使ってお茶を持ってきたのは、お花がトレードマークの初春飾利だ。

白井の目の前にお茶を置き、休憩を促す。

「それにしても、書庫(バンク)に該当者がいないとは・・・・手詰まりですの」

そう言って白井は、手元にある書類に、再び目を通す。

載っているのは、今回の使用されている能力者のリストと、現在の状況を引き起こしうることが可能な能力者の書類と、犯行地の場所、状況、起こったことの書かれている書類だ。

「それにしても、書庫に該当者がいないのは、おかしいですね。」

「そうなんですの。該当者はこの釧路帷子一人のみ・・・・。ところがこの方は犯行時刻にはベットの上ですの。まったく分かりませんわ。」

手に持っていた書類を置き、運ばれてきたお茶を口へと運ぶ。

お茶飲み終わった白井はコップを机に置き、本日何度目か分からない溜息を吐いた。

「書庫に載っていない能力者とか、ここ最近で一気に力をつけた能力者とかは、いないんですか?」

「まさか・・・、一気に力をつけるなどありえませんわ。ましてや、書庫に載っていない超能力者など――――――」

と、そこで白井の動きが止まった。

「どうしたんですか？白井さん？」

「いえ・・・ありえませんわ。」

言葉どおり、まさか・・・、といった感じを体で表現する白井。

その様子を不思議に思った初春は、白井に質問をする。

「犯人に心当たりでもあるんですか？」

「えぇ、まぁ。可能性はありますの。書庫のデータとまったく一致しない人が。」

「誰ですか？それ？」

「お兄様ですの。」

初春の動きが止まった。

面識があるからだ。それも、自分の親友を助けてくれた人だ。

「ありえませんよ！だって、佐天さん助けてくれた人なんですよ？そんな人が、こんな事件を起すと思いますか？」

「そうですが・・・。万が一でも、今は可能性を潰しておきたいんですわ。」

初春の声を無視して、白井はポケットから携帯を取り出す。

白井の携帯は、ＳＦっぽさを重視して機能性二の次のハッタリ携帯で、かなり使い辛いようだ。

その使い辛い携帯から、お兄様、すなわち九条龍也の携帯電話番号をよびだして、電話を繋げる。

ワンコール、ツーコールと音が鳴ったところで、相手は電話に応じた。

『――――只今、留守にしております、ピーッとなりましたら、お名前と』

「ふざけないで、話を聞いてくださいですの。」

『サーセンｗｗｗ』

すぐに電話に出たと思ったら、第一声からふざけていた。

白井はそのことに頭を痛めつつも、時間が惜しいので、話を進めることにした。

「お兄様、虚空爆破事件という事件を知っていますか？」

『虚空爆破・・・あぁ、最近ニュースでやってる事件ね。それが、どうかしたのか？』

返って来た返事はいたって普通の返事だった。

まるで、本当に知らないような。

しかし、これだけで決める訳にはいかず、白井は単刀直入に聞くことにした。

「単刀直入に聞きますの。お兄様が犯人ではありませんわよね？」

『は？違うに決まってんだろ。で・・・何で俺だと？』

「犯行可能な人物が、書庫にいませんの。そして――――――」

『――――書庫のデータが違う人物で、尚且つ爆発の起せる奴が俺だったと？』

「そうですの。」

白井は思わず首を縦に振ってしまう。

見えないと分かっていても、人間は反射的にやってしまうものだ。

白井のすぐ横にいる初春も、白井と龍也の会話を聞いており、ハラハラドキドキのようだ。

『あぁ、確かに俺は能力的に犯行可能だろうな。』

「それでは――――――」

『まぁ、最後まで話を聞け。テレビで言っていたが、犯行時刻の一つとされる、7月15日4時過ぎ。俺は白井に何をされていた？』

電話でそう言われた白井は、その日の出来事を思い出していく。

隣にいる初春も気になるようで、白井のことをジッと見つめている。

しばらく考えたところで、白井はハッと思い出した。

「……お兄様を第一七七支部に連れてこようとしていましたわ。」

『そーいうこと。だから、俺には犯行不可能なわけ。わかった？』

「分かりました。こんな時間に失礼しましたわ。」

白井はそう言って電話を切った。

こんな時間といっても、まだ6時ぐらいで、実際そんなに遅くない。

因みに、龍也は最後の言葉に感動していたりするのだが。

「はぁ・・・、これでまた手詰まりですの。」

「あんまり思い通りにいきませんね・・・」

白井は何回目か分からない溜息を吐き、ぐったりとした。

結局、その日は何も分からずじまいだった。

※※※※※※※※※※

時間は元に戻る。

ｓｉｄｅ　龍也

俺こと、九条龍也は、７月１８日の今日、当麻と出かけていた。

別に、ミコト達と行くのが嫌だったわけではない。

ただ単に、当麻と先に約束をしていただけだ。

原作のこの日は虚空爆破の日だけれども、当麻も現場にいたので、どっちでもよかったのだ。

そんな俺は、今ベンチで待機している。

え？何でそんな事してるのかって？

当麻が飲み物買ってくるのを待ってるんだよ。ジャンケンで俺が勝ったから。

え？パシリだって？違う違う、あいつの運が悪いのがいけないんだ。

と、ボーっと待っていると、当麻が戻ってくるのが見えた。

「おーい、飲み物買ってきたぞー！」

当麻は俺の近くまでくると、持っている2本の内1本を俺に渡す。

俺に飲み物を渡した当麻が、俺の隣に座ったのを確認して、俺は気になった事を聞いてみることにした。

「――――で、その子は誰？」

当麻の手をしっかりと掴んでいるのは、少女だった。

いや、むしろ幼女だ。

「おにーちゃん！はやく行こう！」

「はいはい、ちょっと待ってねー。」

手を握っている幼女に、そう語りかける当麻。

……これは、

「当麻、気持ちは分かるが、犯罪は駄目だぞ。」

「違うわ！誰が幼女なんぞに手を出すか！」

なにやら当麻はご立腹のようだ。

いや、傍から見たら、どう見たってそう見えるって。

「おにーちゃん！はやくしてってば！」

「分かったからちょっと待ってね。このお兄ちゃんに説明してから、行くから。」

「はーい！」

そう言って当麻は幼女の頭を撫でる。

…やっぱりそうだろ。

「え、何なのその子？」

「何か、Ｓｅｖｅｎｔｈ　ｍｉｓｔに行きたいらしくてさ――――」

「で？」

「――――悪いけど、付き合ってくんね？」

最初から分かっていましたとも。

※※※※※※※※※※

ｓｉｄｅ　美琴

私達、私と佐天さんと初春さんで、Ｓｅｖｅｎｔｈ　ｍｉｓｔに来ていた。

りゅう兄も誘ったんだけど・・・断られちゃって・・・

「こっち、こっち！」

私と初春さんより先に、エスカレーターを上って行った、佐天さんが声をかけてくる。

佐天さんは、声をかけると先に行ってしまった。

「初春さんは見たい所ある？」

「あー、特に決めてないんですけど・・・・」
隣にいる初春さんに声をかけると、そんな返事が返ってきた。
私は・・・・パジャマかな。うん。
「うーいーはーるー！ちょっと、ちょっと！」
「な、なんですか！？」
周りを気にせず叫ぶ佐天さんに、初春さんは慌てて近寄っていく。
向かったのは、下着屋だった。
「じゃーん！こんなのはどうじゃ！」
そう言って取り出したのは、真っ赤な下着だった。
あれは・・・・ちょっと・・・・
「む、無理無理無理ですっ！そんなの履ける訳ないじゃないですか！」
「これなら私にスカートを捲られても、堂々と見せ付けられるんじゃない？」

すると、初春さんはこれでもかと言わんばかりに、ブンブンと横に頭を振り、反論した。

「見せないで下さいっ！捲らないで下さいっ！」

「ありゃー？残念。」

初春さん。それが、普通です。

佐天さんは、捕まらないのかな？

「あ、御坂さん！何か探し物あります？」

「え？そうね・・・私は、パジャマとか。」

「あぁ！だったら！こっちですよ！」

今度は初春さんが反応し、先導していく。

「色々回ってるんだけど、あんまりいいの置いてないのよねー。・・・お？」

それに私はついて行っていると、ふと、目の端に気になるものを捉えた。

それは、ピンクのパジャマだった。

これは・・・・いい！

思わず立ち止まった私に、二人は寄ってくる。

「ねーねー、見てこれ！かわ「うわー、見てよ初春、このパジャマ！こーんな、子供っぽい服、今時着る人いないよねー？」

私は思わず固まってしまった。

「小学生の時くらいまでは、こういうの着てましたけど、流石に今は・・・・」

「そ、そぉーよね！中学生にもなって、これはないわよね！うん、ない、ない！」

「「？」」

私の言葉に、首をかしげる二人。

うぅ、今は我慢しないとっ！

「あ！私ちょっと、水着見てきますっ！」

「あ、水着なら、あっちにありましたよ。」

「本当？」

チラリと確認すると、二人は去っていく。

「（いいんだもん！どうせパジャマなんだから、他人に見せるわけじゃないし・・・）」

よし・・・今のうち！一瞬合わせてみるだけだから！

えいっ！それ！

私は素早くパジャマを取り、体に合わせて鏡を見る。

「（うん、いい感・・・じ・・・？）」

「なにやってんだ？ミコト？」

って、えぇぇぇぇぇぇ！？何で、りゅう兄がここに！！？来れないんじゃなかったの！？

※※※※※※※※※※

side　龍也

おお、驚いてんな。

「何でりゅう兄がいるの！？」

「何だ？俺がいちゃいけないのか？」

俺の言葉に、それは違うけど・・・と、ミコトの声はだんだん小さくなっていく。

まぁ、最初が大きすぎただけだが。

「おにーちゃーん！」

「おい、龍也！何してんだ？」

と、そこに遅れて少女と当麻がやって来た。

それを見たミコトは、かなり驚いている。

「あ、風紀委員のおねーちゃんだ！」

「お、お、お兄ちゃんって、りゅう兄妹がいたの！？」

あ、驚くところそこなのね・・・

ミコトに会えたのが、よほど嬉しかったのか、少女ははしゃいでいる。

「いや、妹はいないけど‥‥。この子は、当麻が連れてきた厄介ごとだよ。なんでも、Ｓｅｖｅｎｔｈ　ｍｉｓｔに行きたかったんだと。」

「厄介ごととは何だ！厄介ごととは！」

とりあえず、ミコトの誤解を解くために、状況の説明をした。

が、どうやら己が厄介ごと呼ばわりなのが、当麻は気にくわないようだ。

だって、横から五月蝿いほど叫んでくるもん。

「俺はただ、この子が洋服店に行きたいって言うから、連れてきただけだっての。」

それを俺は厄介ごとと言ってるんだ。

だってこの子が爆弾運んでくるようなものだし。

「あのね！おにーちゃん達に連れてきてもらったんだ！わたしも、テレビの人みたいに、お洋服でオシャレするんだもん！」

「そーなんだ。今でも十分、オシャレで可愛いわよ。」

自慢するように言う少女に、ミコトは笑顔で返事をしている。

うん、絵になるな。

「……短パンの誰かさんと違ってな。」

「うっ！？」

当麻……一言余計だ……。

ミコトも十分可愛いと思うのだが……やっぱりフラグメーカーは言う事が違うな。

さっすが当麻！俺達にできないことを、平然とやってのける！そこに痺れるぅ！憧れるぅ！

……冗談です！だからその手を下ろして！アッーーー！

「何よ！やる気！？だったら何時ぞやの決着を今ここで！」

「あん？お前の頭の中はそれしかないのかよ？……はぁ、だいたい、こんな人の多い場所で始めるつもりですか？」

「俺も当麻に一票。」

「うぅ！」

当麻と俺に言われると、可愛く唸るように引き下がるミコト。
だが、そこが（ｒｙ

そんな会話をしいると、少女は俺達の服を掴んだ。

「ねぇねぇ、お兄ちゃん。あっち見たい！」

「お、分かった。」

「はいはい、行きますよー。」

少女に手を掴まれながら、移動していく俺達。

今もまだ、ミコトは唸っているが。

「じゃーねー！おねーちゃん！バイバイー！」

少女が笑顔で手を振ると、ミコトは苦笑いながらも、手を振り返してきた。

っていうか、背中のパジャマ、隠しきれてないぞ。ミコト。

※※※※※※※※※※※※※

side　三人称

その頃、第一七七支部では、白井黒子が溜息を吐いていた。

「はぁ・・・・」

右手にマグカップを持ちながら、爆破の元となっていた、アルミの残骸に目をやっている。

白井のすぐ近くでは、もう一人の女性がパソコンを熱心に見ていた。

「もしかして・・・・、手口は同じだけど、同一犯じゃない・・・・、とか？」

「まさか・・・・」

「言ってみただけ・・・・」

彼女の名前は、固法美偉（このりみい）。メガネを掛けた女子高生風紀委員で、研修などで迷惑をかけてきたこともあり、白井にとっては頭の上がらない存在の一人だ。

自分の推論を、白井にすぐに否定されたが、自分でも無茶苦茶な推論と自覚していたらしく、特にショックを受けた様子はない。

「あまりにも関連性がなさ過ぎるから・・・・」

「急ぎませんと、また次の犠牲者がでるかもしれませんわ。」

「せめて、手がかりを見つけないと・・・・。同僚が９人もけがをしているし・・・・」

「ん？」

固法の何気ない一言に、思わず白井は、飲み物を飲むのやめ、固まってしまう。

「・・・９人？」

「ん？どうかした？」

白井の呟きに、固法は反応し、白井の様子がおかしいことに気がつき、声をかける。

その問いに、白井は少々顔を顰め、答えた。

「いくら何でも多すぎません？」

「「はっ！」」

二人は意思疎通をするように見つめあい、一瞬間を開けて、結論をだす。

「まさか！ターゲットは！？」

「ビーッ！ビーッ！ビーッ！」

二人が次の言葉を発する前に、パソコンから音が鳴った。

画面には、ＡＬＥＲＴ！の文字が映っている。

次の瞬間、画面が変わり、次々にグラフが表示されていく。

「衛星が、重力子の加速を確認！」

二人の間に緊張が走る。

急いで観測地点の場所を確認する。

その場所を確認するなり、白井は慌てて電話を掛けた。

※※※※※※※※※※

「ピリリリリ！ピリリリリ！」

場所は変わってＳｅｖｅｎｔｈ　ｍｉｓｔ。

美琴、初春、佐天の３人組みは、仲良く洋服を眺めていた。

「？初春？携帯鳴ってない？」

「あ、本当だ！」

初春は佐天に指摘され、スカートのポケットから、赤い携帯を取りだす。

初春は、素早く取り出した赤い携帯の画面を開き、画面に映っている白井の文字に、疑問を抱くが、とりあえず電話にでる。

「はい、もしも『初春！！？』！？」

電話の声があまりにも大きくて、初春は思わず耳を手で塞ぎ、精一杯携帯から耳を離す。

何だ、と思いつつも、携帯を再び耳に近づける。

『虚空爆破事件の続報ですの！』

「え？」

相変らず大きな声に初春はビクビクする。

が、内容が内容なだけに、思わず聞き返してしまう。

『学園都市の監視衛生が、重力子の爆発的加速を確認しましたの！』

「か、観測地点は！？」

初春が白井に聞き返すが、白井は無視して説明をする。

『今、近くの警備員を急行させるよう手配していますの！あなたは速やかにこちらに戻りなさい！』

「ですから！観測地点を！？」

『第七学区の洋服店、Ｓｅｖｅｎｔｈ　ｍｉｓｔですの！』

初春は思わず固まってしまった。

「・・・Ｓｅｖｅｎｔｈ　ｍｉｓｔ？」

事件の中心が、自分のいる所と知ると、初春は思考が停止する。

繰り返すように呟くと、自分の状況を確認した初春は、顔が真剣になる。

「丁度いいです！私、今そこにいます！すぐに非難誘導を開始します！」

初春は避難誘導をする為に、白井の返事を聞かずに電話を切った。

そして周りをみると、初春のただならぬ様子を、心配そうに見つめる2人がいた。

「落ち着いて聞いてください。犯人の次の標的が分かりました。この店です！」

「な、何ですって！？」

美琴は状況を聞き驚愕し、佐天は心配そうに初春を見る。

「御坂さん、すみませんが、非難誘導に協力してください。」

「うん、分かった。」

いきなりの事態に戸惑いつつも、美琴は自分のすべき行動に移る。

「佐天さんは非難を。」

「……あ、うん。初春も気をつけてね。」

暗い表情をする佐天の返事を聞いた後、初春は頷き走り去る。

佐天も着いていきたかったが、できなかった。

自分には、力がないのだから。

※※※※※※※※※※※※※

ｓｉｄｅ　龍也

俺は今、非常に焦っていた。

つい先ほど、店内のアナウンスで非難誘導がされていた。

内容は電気系統の故障とのことだったが、非難が目的なのは明らかだった。

皆非難したのか、人っ子一人もいやしない。

「クソッ！この階も違うか！」

この階層を調べ終えた俺は、不自然じゃないくらいの速度で、階段に向かう。

虚空爆破事件の犯人を先に捕まえようとしたのが間違いだった。

どこを探しても見当たらず、恐らくすでにあの少女がぬいぐるみを持っているだろう。

ならば向かうべき場所は、初春達の所だ。

俺は速度を少し高め、角を曲がる。

そこは十字路だった。

十字路の中心に、初春が立ち、そこに少女が近づいてきている。

今まさに手渡そうとしているのだ。

それを確認した俺は、皆ビックリな速度で接近する。

右側の通路に美琴と当麻がいたが、原作みたいに間に合いそうにない。

次の瞬間、グニャリと、ぬいぐるみが歪んだ。

「逃げてください！あれが爆弾ですっ！」

初春はそう叫んで、少女が怪我をしないように、覆いかぶさった。

ぬいぐるみは、歪みながらも転がっていく。

「くそっ！」

俺はぬいぐるみと初春達の間に割り込み、立ちふさがる。

美琴は超電磁砲（レールガン）を撃とうとしたが、その射線上にいる初春達（俺はともかく）が邪魔で撃てないようだった。

このままでは、美琴が防御できないので、素早く横の当麻に指示をとばした。

「当麻！そっちは頼んだ！」

その一言で通じたらしく、当麻は美琴とぬいぐるみの間に割って入る。

俺と当麻が右手を突き出した瞬間――――――――

※※※※※※※※※※

ズガァァァァン！！

目の前の店から、とてつもない爆発が起こった。

「な、なんだ！？」

「爆発したぞ！！」

「例の連続爆破テロじゃない？」

「まだ中に人がいるみたいだぞ！」
そとの奴らは大パニックだった。
クッククク。成功だ！
僕は感づかれる前に、この場を離れる。
目的地はないが、とにかく離れよう。どうせ無能な風紀委員には気づかれないだろう！
いいぞ！凄い！素晴らしい！
徐々に強い力を使いこなせるようになってきた！
「フフフフ！」
思わず口から笑い声がこぼれる。
曲がった通りは、路地裏だった。
「ククク！もうすぐだ！あと少し数をこなせば、無能な風紀委員も！あの不良どもも！皆まとめて、ふっと――――グハッ！？」
後ろから強い衝撃が僕を襲った。

僕の体は周りのゴミを飛ばしながら、転がっていく。

「い、いったい何が・・・・？」

僕は思わず呟いてしまった。

とりあえず、両手を地につき、体を起す。

「はーい？」

顔を上げると、茶髪の少女が立っていた。

何事かと驚愕していると、向こうが勝手にその問いに答えてくれた。

「用件は言わなくても分かるわよねぇ？爆弾魔さん？」

なっ！？なんでそれが！！？？

内心かなり動揺しつつも、なるべく表に出さずに返事をする。

「な、なんのことだか、僕にはサッパリ・・・・「まぁ、確かに威力は大したもんよね。・・・でも、残念。死傷者どころか、誰一人かすり傷一つ負ってないわよ？」そ・・・そんなバカな！？僕の最大出力だぞ！！」

「へぇ・・・・」

目の前の少女が、してやったりと言いたげな目でこちらを見てくる。

ま、まずいっ！こいつを倒して口封じしないと・・・・！

「いやぁ、外から見ても、凄い爆発だったんで――――――ん？」

辺りをチラリと見ると、自分のバックから、アルミ製のスプーンがはみ出しているのが見えた。

これを使えば！

僕は話しながらスプーンに手を近づける。

「――――――中の人は、とても助からないんじゃないかって！！」

僕がスプーンを投げるために振り上げた瞬間、雷撃が迸り、スプーンを吹き飛ばした。

「グアァァァァ！？」

その攻撃の衝撃波で、僕の体も吹き飛ばされた。

死なないあたり、手加減されてるのだろう。

「れ、超電磁砲（レールガン）・・・今度は常盤台のエース様かよっ！！」

僕は近くにあった、アルミと書かれた缶を量子加速させ、爆弾に変える。

それを投げつけようと振り上げると――――――

「はい、そこまで。悪あがきは終了な。」

――――手を添えられて、量子加速を打ち消された。

量子加速されなくなったアルミ缶は、爆発しなくなる。

「な！？」

慌てて振り返ると、右手を添えた、ポニーテールの男がいた。

「な、何をした！？」

驚愕して聞くと、余裕の態度でご丁寧に説明してくれた。

「俺の能力だよ、ワトソン君。君の能力を、俺の右手で打ち消しただけだ。・・・魔法使いという名に覚えはないかな？」

魔法使い・・・そうか！こいつが今噂の・・・！

はは、またか。またなのか！

「はっ！いつもこうだ！何をやっても！力で地面に捻じ伏せられる！殺してやる！お前らみたいなのが悪いんだよ！風紀委員だって同じだ！力のある奴は、皆そうだろうが！」

「・・・力、力って！」

僕に近寄ってきていた超電磁砲が、僕の襟を掴む。

「歯をくいしばれっ！！」

無理やり持ち上げられた僕は、彼女に殴られた。

その拍子に、音楽プレーヤーが地面に落ちる。

「ったく。」

超電磁砲は、僕を殴った後踵を返し、路地裏を出て行った。

「俺もお前を殴り飛ばしたいところだが・・・まぁ、いいや。白井、あとよろしく！」

彼もそう言って路地裏から出て行く。

「まったく、気づいているなら、言ってくれればいいんですのに。」
横から声がしたので見上げると、ツインテールの少女が立っていた。
腕には憎き風紀委員の腕章を着けている。

「殴られて当然ですわ。あなたみたいに、力を言い訳にする人は、一番許せないタイプでしょうから。」
風紀委員の少女は、何も言ってないのに、語っていく。
言い返したいけれど、僕は反論できなかった。

「・・・ご存知かしら？常盤台の超電磁砲は、もともとは単なるＬｅｖｅｌ　１でした。並々ならぬ努力によって、Ｌｅｖｅｌ　５と言われる力を得たんですの。」
その言葉を聞いて、頬の痛みが増したような気がした。
先ほどの言葉が重く感じた。

「でも、例えＬｅｖｅｌ　１だったとしても、お姉様はあなたの前に立ちふさがったでしょう。」
僕は大人しく連行された。

※※※※※※※※※※※※※

「行ったか・・・・・」

俺は犯人と白井がいなくなった路地裏に来ていた。

ここに用事があるのだ。

少しあたりを見渡すと、地面のあちこちにゴミが散らばっている。

ミコトの超電磁砲の余波で散らばったんだろう。

少し奥に進むと、目的の物を発見した。

それは、犯人の落とした音楽プレーヤー。

すなわち、幻想御手（レベルアッパー）だ。

「これ・・・か。」

俺はそれを拾い上げて、聞かないようにするため、イヤホンを捨てる。

左手を空に振ると、そのラインにそって空間が裂け、スキマができ

る。

音楽プレーヤーをその中にぶち込むと、その場を去った。

そう、これが全ての始まりだ。

まだ、序章にすぎない。

とある科学の超電磁砲の物語は、ここから動いていく。

さて、ここから物語はどのように変化していくだろうか。

とある科学の虚空爆破（後書き）

はい、第7話でした。

原作とあんまり変わんねー……。

これからどうしようか？

描写が雑だ！雑すぎる！

戦闘描写もこれと言ってないし！……手抜きだなぁ。

文才が欲しい。

次は……ちょっとしたフラグ回収かな。

んで、その次がインデックス編で、その次がファミレス木山編、その次がステイル編かな。

それではまた次の投稿日に。

誤字・矛盾があれば、報告お願いします。

ＰＳ．どーでもいいけど、爆弾持ってくる少女の声優さんって、「おれ妹」の桐乃の人なんだよね。

うん、本当にどーでもいいけど。

とある少女の日常記録（前書き）

・・・投稿遅れました。

いや、もう大変でしたよ。テスト期間に、熱も出て。

腹痛で死ぬかと思いました。

今回は、主人公あんまりでないかも。

それと、短めです。

それでは、第八話です。どうぞ。

とある少女の日常記録

それは、夢だった。

自分の前では、一人の少年が、楽しそうに何かを語っている。

黒髪の長い髪をした少年だった。

言っている内容は分からないけれど、自分に楽しそうに語っている。

聞いている自分も、何だか楽しい。

辺りを見渡してみると、そこはどこかの部屋だった。

窓なんて存在しない、人口の光に照らされている、密室のような部屋だった。

”私”は、ここを知っている。

だけれど、今見ているこの景色は、”私”の記憶(もの)ではない。

これは――――――

※※※※※※※※※※※※※

ｓｉｄｅ　？？

私は、ゆっくりと目を開けた。

目を開けると、一気に光が私の目に入ってきて、頭がクラクラする。

自分の目に合っていないメガネを掛けているような、ぼやけた景色が目に映る。

私は重たい体を持ち上げて、目をゴシゴシと手で擦り、立ち上がる。

手早く着替えを済ませると、一息吐いて、起き上がったばかりのベッドに腰を掛ける。

懐かしい夢だった・・・・

ベッドに座りながら、そう感じた。

だけれども、あの夢の記憶は私のものではない。

そう、ずいぶん前の”私の元になった”人の記憶だから。

私はそんなことを考えてる自分を憂鬱に感じ、頬を両手で叩いて気合を入れる。

切る機会に恵まれず、今や腰辺りまで伸びた髪を、あの人のようにポニーテールにして、立ち上がる。

改めて部屋を見渡すと、随分と質素な部屋だと自分でも思う。

必要最低限の家具に、洋服、書類などしか置かれていない。

唯一違うのは、一枚の写真があるくらいだった。

その写真に写っているのは、”何代も前の私”だった。

もう一人、夢の中の少年も写っている。

”私”ではないけれど、写っているのは”何代も前の私”だけれども、この写真だけは、”今までの私”が、捨てる事を拒否しているように感じた。

思い耽るのはいけない、そう思った私は立ち上がった。

だけれど、私は何時死ぬか分からない。

明日かもしれない、明後日かもしれない、もしかすると、今日かもしれない。

だから、もうちょっと思い出に浸っていてもいいですよね？

「コンコン」

暫らく思い出に浸っていると、ドアがノックされた。

それは週に2・3回ある、地獄のような時間の始まりを告げるものだった。

「来い、時間だ。」

男性独特の低い声が、ドア越しに聞こえてきた。

やっぱり・・・と、思っていしまう。

私は、特殊な力を扱うことができた。

それは、今までに確認されたことのない力だったらしい。

だから、ここで実験されている。

それも、夢のような目標のために。

連れてこられた場所は、いつもの場所だった。

ここの研究所の、実験室だった。

上を見上げれば、実験室でよくあるような、ガラス越しに覗いている研究員達が目に映る。

皆こちらを見つめていて、期待しているような、諦めているような目をしていた。

私の体にコードが取り付けられていく。

「始めろ。」

私は能力を発動した。

※※※※※※※※※※

side　龍也

「はぁ……」

俺は溜息を吐いた。

・・・別に、疲れているわけではない。

目の前のパソコンにある、これから解析すべき量を見ると、鬱になっているだけだ

つまり、疲れるのはこれからだ。

「・・・鬱だ。」

本当に・・・・

え？何を解析しているかって？

禁則事項です。

・・・うん、やめよう。

俺はそんなことを考えながらも、高速でキーを叩いていく。

まぁ、ぶっちゃけ、能力使ってるから簡単だけど。

あれだ、単純な作業を繰り返すと、精神的にくるのと同じだ。

今日は、ミコトのファミレス騒動がある日なのだが、俺が居ると前

回の強盗事件のときみたいに暴走するかもっ！と、皆に激しく言われて、追い返された。

俺だけ仲間外れだよぉ・・・・

ふと、パソコンの画面の時間を見ると、１２時を過ぎていた。

「飯にするか・・・・」

腹が減っては戦はできぬ、操作を中断し、冷蔵庫の前まで移動して、使える食材を探す。

何かあれば、あり合わせで作ろうと思ったのだが・・・・・・

「からっぽか・・・・」

そう言えば、最近全然買出ししてなかったな・・・と、若干後悔を覚えつつ、財布を手に取る。

まぁ、今回ばかりは仕方ないし、外食でもするか・・・・。夕食は、土御門のところに行けば、料理を作るのを交換条件に、食べさせてもらえそうだし。

そうと決まれば、と着替えをして、玄関から出ようとしたが、ここであることを思い出し、部屋に一度戻った。

「・・・危ない、危ない。今日は停電の日だったか。コンセント抜いておこ。」

気を取り直して、今度こそ外にでた。

俺は学生寮のある第七学区を離れて、第三学区に来ていた。

見るからに食品関連ばかりで、レストランも多く存在している。

まぁ、だからこの学区に来たわけだが。

レストラン、と言っても、この学園都市では、そこら辺でいいや。などといった気持ちで入ると、ゲテモノ料理に当たるので、慎重し選ばなければならない。

俺は一度、芋虫料理店に入ったことが・・・・・あぁっ！だめだ！思い出しただけでも鳥肌がぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？

ゴフォン！失礼、取り乱した。

まぁ、ともかく、学園都市ではよくメニューを見たうえで入った方がいい。

と、そこでふと気になる看板が目に入った。

「屯喜朋亭（どんきほーて）」

……いろいろ突っ込んでいいよね？

意識したのか？これ？

メニューはっと……玉子焼き定食（６５０円）、チキンカツ定食（７００円）、チキン南蛮定食（７００円）、野菜炒め定食（７００円）、鶏唐揚げ定食（７５０円）、焼きそば定食（７５０円）、とんかつ定食（７５０円）、豚しょうが焼き定食（７５０円）、炒飯（チャーハン）定食（７５０円）

……普通だな。学園都市にあるわりには、普通だな。

まぁ、この際名前には目を瞑ろう。ここにしよっと。

俺は、チキンカツ定食かな。

７００円の出費かぁ……正直、痛手かも。

最近宝くじとかやってないから、貯金が底をつきはじめたなぁ。

今度やっとこ。

定食を食い終わった俺は、特に目的もないので、フラフラと歩き出した。

今やっておかなければいけないことは特に無いし、別に暇しても損はないどろう。

そんなことを考えながら、フラフラと歩いていると、路地裏から”とある臭い”が漂ってきた。

これは……血の臭いだ。

思わず立ち止まってしまい、路地裏を凝視する。

光が差し込まないせいで、路地裏の奥まで、よく確認できない。

”白眼（びゃくがん）発動！”

次の瞬間、世界がモノクロに変わった。

意識的に力を操作し、路地裏の奥を視る。

景色がドンドン入れ替わり、とある光景が目に入った。

それは人だった。髪が長いので、恐らく少女だろう。

お腹を押さえて、壁に手を着き、吐血している。

その光景を視た瞬間、俺は白眼の発動をやめ、瞬歩で急接近した。

・・・・・この少女、どこかで見たことある気がする。

※※※※※※※※※※

ｓｉｄｅ??

私が次に目を開けたのは、１週間後だった。

記憶の中でいつも担当医師をしている、カエル顔の医者は、無理をしすぎたせいで、いつもより長く眠っていたとのことだった。

また・・・失敗か。うん、できるわけないよね。あんなこと。夢物語は所詮夢物語。実現はできない。

私の実験はいつまで続くのかな・・・?苦しい・・・そう私は感じた。

感情なんて、私は学習(プログラム)されていないから、思い違いかもしれない。

それでも・・・苦しい。そう感じる。

いつ退院できるか。そうカエル顔の医者に問うと、

「体には、もう異常はないね。すぐにでも退院できるよ。」

そう、返事が返ってきた。

1週間後……、よかった。休みの期間はまだ残っている。

実は私は、第三学区にあるシュークリーム店の、シュークリームを食べるのが楽しみだったりする。

だって、女の子だもの。

私は手馴れた手つきで、退院の準備を進め、そそくさと去っていった。

あまりに手馴れていたせいか、看護士さんが驚いていたのを、内心笑っていたのは秘密だ。

第三学区に着くと、真っ先にシュークリーム店に向かった。

奇妙な食べ物ばかり出す、この学園都市でも珍しく普通なお店のひとつだ。

渡されている数少ないお金をだし、買えるだけシューを買い込む。
店員さんも、私を見慣れているのか、不思議な顔をせずに売ってくれた。

「はむ、はむ、はむ。」

やっぱりおいしい。

私がかなり早く食べている（店員が言っていた）せいか、周りの人が驚いた表情でこちらを見て来る。

最後の一つを口に放り込むと、私服の服からゴミを払いながら立ち上がった。

因みに、私の私服は、白のワンピースに、フリフリの付いたピンクのスカートだ。

さて、研究所に戻らないと・・・・

踵を返し、研究所に向けて歩き出す。

え？逃げないかって？それは無理よ。超小型発信機が、私の体内に存在してるから。

ちょっとでも怪しく動けば、抹殺ってね。

そんなことを考えながら、信号が変わるのを待っていると、ある光景が目に飛び込んできた。

それはネコだった。真っ黒なネコだった。

向かい側に渡ろうとしているらしく、道路に跳びこんでいるみたいだった。

だけれど、ネコの死角からくるように、そこに車が走ってきたのだ。

危ないっ！

そう考えた時には、すでに行動していた。

自分でもあまり発動したくない能力を、意図的に発動させた。

がらりと世界が変わった。

まるで止まっているかのようだった。けれど、ゆっくりと、確実に、車はネコに迫っている。

時間が無い。

そう考えた私は、スローの世界の中、ネコの元まで素早く走り、抱え込み、離脱する。

限界だ‥‥。

能力の発動をやめ、安全な場所に退避した。再び世界は元に戻り、普通の速度で動き出した。

「にゃー！」

ネコはありがとう！と言うように、一鳴きした後、そそくさと逃げていった。

私もっ！人目のつかないところに行かないとっ！

フラフラとした足取りで、路地裏に入り、壁に手を着いた。

「ゴホォ！ゴホッゴホッ！！」

吐き出すように咳を込むと、口から血がドバっと出てきた。

私の力の反動だ。

私の力は強力な代わりに、反動が大きい。普段はここまで大きな吐血はしないのだが、病み上がりのせいか、いつもよりも吐血の量が

多い。

「大丈夫か！？」

片手で血を拭い、立ち上がろうとしていた私は、その声にビクリと反応する。

見られた！？

バッと振り返ると、そこでさらに固まってしまった。

この人はっ！！？

そこに居たのは、黒髪ポニーテールの男の子だった。間違いない、見間違うはずが無い、この人は――――――

「仰向けでジッとしてろ！治療してやる！」

ボーっと固まっていると、地面に仰向けにされて、なにやら光を纏う手で治療された。

気持ちいい・・・・。

痛みがドンドン抜けていくのを感じた。万全・・・とまでは行かなくても、問題なく行動できる。

「あ、もう大丈夫です。」

「ん？そうか？それならいいんだが・・・」

私がそう言うと、男の子は手をどけて、立ち上がりやすいように、手を差し伸べてきた。

私は手を取ると、素早く立ち上がる。

男の子の顔を間近で見たが、やっぱり間違いない。あの人だ。

「あの、あなたは――――」

昔、研究所にいませんでしかた？と、言おうとしたところで、踏みとどまる。

――――いいか、あいつとは、接触してもしらないふりをしろ。計画を知られるわけにはいかない。

記憶が鮮明に蘇る。

そうだった・・・話しちゃ、いけないんだよね。

「俺か？俺は九条龍也だ。」

どう受け取ったのか、自己紹介をされた。

まぁ、ちょうどいい。このまま振り切ればいいのだ。

「治療、ありがとうございます。それではまた今度。」

そう言い残し、さっさと路地裏を出た。

「ちょ、ちょっと！？」

後ろで何か言っているが、気にしない。接触してはいけないのだから。

――――――でも、少し期待していたのかもしれない。

※※※※※※※※※※※※

side　龍也

「ちょ、ちょっと！？」

俺は声を掛けるが、さっさと行ってしまった。

別に、追いつけるのだが、背中がこないで下さいと言っているのだ。

・・・嫌われることしたかなぁ？

「はぁ・・・・」

何もしていないのに、ため息がでる。

治療してあげたのに・・・・助けてあげたのに・・・・

フラグが立つところだろ！そこは！

・・・・いや、べつに、これが本音ってわけじゃないよ？ただね？当麻は、ぶつかっただけでフラグが立つのに、何か俺だけ理不尽じゃね？扱いがさ？

血だまりを無くしながら、思う。

理不尽だ・・・・と。

・・・・・やっぱり、あの少女、どこかで見たことあるような？

とある少女の日常記録（後書き）

はい！第八話でした。

今回は、フラグの回収にしました。

少女の能力・・・・・大体分かりますよね？

とりあえず、少女の詳細についてはまだです。

屯喜朋亭（どんきほーて）ですが・・・実在します。

確か・・・昭和５０年くらいの創業だった筈。

作者、実際に食べたことは無いですが、おいしいらしいですよ？

では、誤字報告、あればよろしくお願いします。

次は、いよいよインデックス編です。

禁書が原作突入です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0104p/

とある一人の幻想操作

2011年2月24日20時29分発行